

熊本大学
永青文庫研究センター

年 報

第14号

2023

熊本大学永青文庫研究センター

はじめに

2023年2月、長年、本センターが研究活動の各に位置づけてきた『永青文庫叢書 細川家文書』（吉川弘文館）が、『災害史料編』の刊行をもって完結に至った。この場をかりてその経緯を記しておきたい。

2009年に文学部附属の研究組織として設置された本センターは、2010年に『永青文庫叢書 細川家文書 中世編』を刊行し、室町期和泉守護細川家の伝来文書群や織田信長の細川藤孝・明智光秀宛文書群等260点を図版入で公開して、本叢書シリーズの先鞭をつけた。その後、2011年から2014年まで、『絵図・地図・指図編Ⅰ』、『近世初期編』、『絵図・地図・指図編Ⅱ』、『故実・武芸編』と、連年の刊行を実現した。

本センターは歴史学（社会史、政治史、経済史）、建築史学、国文学、美術史学をそれぞれ専門とするスタッフを糾合して設置された。上記の5冊は、設置以来取り組んだ永青文庫資料総目録の作成事業と並行し、各分野の調査成果に基づいて編纂されたものであった。まさに怒涛の5年間であって、さまざまな不備も目立つ5冊ではあるが、『中世編』では熊日出版文化賞を受賞し、永青文庫の中世文書群の国重要文化財への一括指定に道をひらくなど、幸いなことに一定の評価を得たと思われる。

次いで2017年、本センターは文学部のもとを離れ、学内共同教育研究施設となって機能強化するとともに、文献史学分野に特化した『永青文庫叢書』第2期の5冊を2019年から2023にかけて連年刊行することになった。『熊本藩役職編』、『島原・天草一揆編』、『地域行政編』、『意見書編』、『災害史料編』がそれである。熊本藩を中心に、近世初期から幕末期に至るまでの藩政の構造的特質とその変化、戦乱や災害・飢饉・疫病への対応を通じて形成されてくる「公共的」と称することも許されるような統治のあり方について、百姓・庄屋層から藩政トップまでを作成主体とする多くの史料を提示することができた。

個人的には、上記の10冊の刊行によって、図版・翻刻文・解説を本格的な装幀でパッケージするという本叢書のスタイルによる出版は、「やり切った」、という感を禁じ得ない。10冊全体の評価を学界諸賢に委ねるとともに、資料公開にかかる新時代のテーマに取り組むための歩みを止めずに、進んでいきたいと思う。

本年報には、2022年度の活動記録とともに、研究成果の記者発表の内容やセンター教員の講演レジュメも収録している。日ごろの活動の一端を感じ取っていただければ幸甚である。

本センターは、今後ともスタッフ一同の協力のもとで、研究・社会貢献事業を発展させていく所存である。引き続き、関係各位のご指導・ご鞭撻をお願いしたい。

2023年3月1日

熊本大学永青文庫研究センター長
稲葉 継陽

目 次

はじめに	1
1. 年間活動記録.....	4
2. 年間活動報告.....	11
(1) 組織運営	11
(2) 研究活動	11
(3) 展覧会・講演会・社会貢献等	14
(4) センターの運営資金	16
3. 個人年間活動.....	17
4. 記者発表要旨.....	23
(1) 青年期の北里柴三郎に関する重要史料を発見	24
(2) 宮本武蔵晩年の人物像を示す新史料4点を発見	29
5. 講演要旨.....	36
(1) 稲葉継陽「細川光尚とその時代」.....	37
(2) 今村直樹「熊本藩の地域経済と河川舟運」.....	41

1. 年間活動記録

日付	活動内容	担当・打合せ先等
2022年4月7日	東京・仙台出張	稲葉
4月13日	菊陽町教育委員会田中氏来訪	今村
4月21日	読売新聞池田記者来訪・取材	稲葉
4月23日	高森町史編集会議（高森町）	稲葉・今村
4月25日	南阿蘇正教寺門徒会にて講演	稲葉・後藤
4月26日	凸版印刷と会議（オンライン）	稲葉
	九州国立博物館出張（修復文書状況確認）	今村・藤井（宰匠）
5月6日	熊本県文化財保護協会役員会	稲葉
5月7～10日	高知県出張（高知県史近世部会、四万十市史料調査）	今村
5月14～15日	放送大学面接授業	今村
5月18日	熊本学園大学附属中学校長田氏・中学生来訪	今村
5月19日	菊池氏関連遺跡委員会	稲葉
	慶應義塾大学大学院外部講師（オンライン）	今村
5月20日	熊本県文化課帆足氏来訪	今村
5月23～27日	松井家文書目録作成調査	参加人数：8人
5月27日	オンライン記者発表「青年期の北里柴三郎に関する重要史料の発見」	今村・広報戦略室
5月29日	八代市坂本町被災史料整理	今村・三澤
5月30日	古閑家文書返却	今村・深瀬（熊本県立図書館）
5月31日	熊本日日新聞浪床記者、鬼束記者取材来訪	稲葉
6月2日	テレビ熊本庄野氏来訪・取材	今村
6月6日	熊本博物館所蔵史料調査	今村
	高森町史打合せ	今村
6月7日	菊陽町史跡見学	今村・田中（菊陽町）
6月9日	人吉城専門委員会	稲葉
6月10日	鶴嶋俊彦氏来訪	稲葉
	熊本県立美術館宮川氏来訪	今村
6月16日	第1回永青文庫研究センター運営委員会	稲葉・今村
6月17～19日	第44回文化財保存修復学会大会	稲葉・今村
6月20～24日	松井家文書目録作成調査	参加人数：8人
6月22日	URA 福田氏広報打合せ	稲葉
6月23日	永青文庫橋本氏打合せ（オンライン）	稲葉・後藤

日付	活動内容	担当・打合せ先等
	読売新聞白石記者取材	今村
6月24日	東京メトロポリタンテレビジョン取材（オンライン）	今村・熊谷（東京 MX）
	熊本日日新聞鬼東記者来訪・取材	稲葉・後藤
6月29日	菊陽町文化財保護委員会	今村
	熊本市歴史文書資料室調査	今村
6月30日	高知県史近世部会（オンライン）	今村
7月1日	古閑家訪問	今村
7月1日	多良木町相良氏関連史跡検討委員会	稲葉
7月7日	E エンターテイメント会議（オンライン）	稲葉
	熊本県文化課川上氏来訪・打合せ	稲葉
7月8日	熊本県博物館ネットワークセンター史料調査	今村
7月13日	熊本県保険医協会理事会（オンライン）	稲葉
7月19日	附属図書館時松氏打合せ	稲葉
7月21日	細川護光氏、学長訪問	稲葉
	熊本博物館展覧会打合せ	今村・三澤・木山（熊本市）
7月22日	熊本日日新聞鬼東記者来訪・取材	今村
7月25～29日	松井家文書目録作成調査	参加人数：8人
7月29日	大分先哲叢書編纂審議会	稲葉
7月30日	中世武家拠点研究会（オンライン）	稲葉
8月1日	熊本日日新聞鬼東記者来訪・取材	今村
8月1日	熊本県文化課財津氏来訪	今村
8月3日	熊本日日新聞鬼東記者来訪・取材	今村
8月4日	熊本さわやか大学校講演	今村
8月5日	小国町教育委員会所蔵史料調査	今村
	オフィスエム松村氏と打合せ	稲葉
8月6日	放送大学公開講演	稲葉
8月8日	URA 福田氏・藤山氏と打合せ	稲葉
8月9日	熊本県文化課川上氏来訪・打合せ	稲葉
8月10～12日	東京出張、永青文庫史料調査	稲葉・後藤
8月13日	大名華族研究会報告（オンライン）	今村
8月17～19日	文化庁永青文庫史料調査	稲葉・今村・後藤
8月22日	宰匠修復文書納品	稲葉・今村
	熊本日日新聞鬼東記者来訪・取材	今村
8月23日	多良木町永井氏来訪、打合せ	稲葉

日付	活動内容	担当・打合せ先等
	天草さわやか大学校講演	今村
8月24日	『村と民衆の戦国時代史』編集会議	稲葉
8月26日	京大岩城氏科研研究会（オンライン）	今村
8月30日	菊池関連史跡文化庁プレゼン検討会	稲葉
9月1日	熊本日日新聞鬼束記者来訪・取材	今村
9月6日	インタージャム史料返却（附属図書館）	今村
	凸版印刷会議（オンライン）	稲葉
9月6～8日	高知県出張（高知県史近世部会）	今村
9月8日	肥後の里山ギャラリー小堀氏来訪	稲葉
9月10日	科研費研究会	稲葉・今村・三澤・久留島（歴博）・木越（石川県）・酒井（聖心）・胡（愛媛大）・定兼（岡山県）・矢野（島根県）
9月12～13日	竹田市納池公園名勝地調査委員会	今村
	NHK 番組取材	稲葉
9月13日	高森町史編集会議（熊本日日新聞社）	稲葉・今村
9月18日	加賀藩研究ネットワーク・熊本藩研究会合評会（オンライン）	稲葉・今村・神谷（横浜開港資料館）・小関（千葉大）・白石（宮内庁）・高槻（神戸大）
9月20日	熊本日日新聞鬼束記者来訪・取材	稲葉・後藤
9月23～24日	仁木科研研究会	稲葉
9月26日	記者発表「宮本武蔵晩年の人物像を示す新史料4点を発見」	稲葉・後藤
	中国新聞社取材	稲葉・後藤
9月30日	高知県史近世部会（オンライン）	今村
	小国町教育委員会所蔵史料調査	今村
10月4日	医学部同窓会遠藤先生来訪	稲葉
	赤松秋雄氏・猪飼隆明氏来訪（於附属図書館）	今村
	永青文庫研究センターにて球磨郡絵図史料の調査	稲葉
10月7日	URA 福田氏来訪・打合せ	今村
10月13日	NHK 番組取材	稲葉・永青文庫林田理事
10月14日	吉田司家訪問	稲葉・後藤
10月18日	熊本さわやか大学校八代校講演	今村
10月20日	熊本県文化課と打合せ	稲葉
	NHK 番組撮影（於附属図書館）	稲葉

日付	活動内容	担当・打合せ先等
10月21日	里山ギャラリー村田氏来訪・打合せ	稲葉
	大津町江藤氏来訪	今村
	熊本市博物館木山氏来訪・打合せ	今村
10月24～28日	松井家文書目録作成調査	参加者：15名
10月24日	熊本県永青文庫常設振興基金活用委員会	稲葉
10月27日	菊池教育委員会西住氏・阿南氏来訪、打合せ	稲葉
10月27～28日	東京出張、NHK「徳川JAPANサミット」収録	稲葉
10月29日	肥後の里山ギャラリー講演	今村
11月1日	さわやか大学大学院小西氏来訪・打合せ	今村
11月3日	第37回熊本大学附属図書館貴重資料展 「悲劇の藩主細川光尚」(~5日)	来場者：377名
	第16回永青文庫セミナー「細川光尚とその時代-天草島原一揆・寛永大飢饉・御国返上-」(於附属図書館1階)	稲葉 参加者：90名
11月5日	八代市立博物館未来の森ミュージアム講演	稲葉
	日本史研究会例会打合せ(オンライン)	今村
11月7日	NHK番組取材	稲葉
11月9日	阿蘇郡市文化財保護委員等研修会講演(小国町)	今村
11月11日	熊本県立美術館宮川氏来訪	稲葉・今村
11月12日	八代市立博物館未来の森ミュージアム講演	今村
	肥後の里山ギャラリー講演	稲葉
11月14日	熊本県文化財保護大会講演	今村
11月16～18日	大分出張、講演(記録史料保存セミナー)・史料調査	稲葉・後藤
11月18～20日	高知出張(予土歴史文化研究会講演、史料調査)	今村
11月24日	甲佐陣内城跡整備検討委員会	稲葉
11月25日	多良木相良氏関連史跡検討委員会	稲葉
11月26日	熊本歴史学研究会講演	今村
11月27日	保田窪1町内文化祭にて講演	稲葉
11月28日	小国町教育委員会出張、展覧会打合せ	今村・高口(小国町)・木山(熊本博物館)
11月28～12月2日	松井家文書目録作成調査	参加者：10名
11月29日	ギャラリートーク打合せ	稲葉・後藤、キャンパスミュージアム推進室

日付	活動内容	担当・打合せ先等
12月1日	キャンパスミュージアム企画ギャラリー トーク（於五高記念館）	稲葉・後藤
	東京大学史料編纂所林氏・村井氏 史料調査	稲葉
	山都町教育委員会西氏・大津山氏来訪	今村
12月2日	熊本県立美術館収集委員会	今村
	熊本日日新聞浪床氏・鬼東氏来訪・取材	稲葉・後藤
	熊本市中央区役所総務企画課宮下氏来訪、 打合せ	稲葉
12月4日	肥後考古学会シンポジウム コーディネーター	稲葉
12月7日	熊本県文化振興課内田氏らと打合せ	稲葉
12月8日	さわやか大学大学院打合せ	稲葉
12月9日	さわやか大学大学院講演	今村
12月10～11日	京都出張（日本史研究会例会コメント）、 津山郷土博物館訪問	今村
12月12日	熊日あれんじ林氏来訪・取材	今村
12月13日	天草市教育委員会宮崎氏来訪	稲葉
12月14日	吉田司家史料視察	稲葉
	熊本大学×ニューコ・ワン共同企画「熊本 城と細川家の明治維新」展（～12月20日、 於蔦屋書店熊本三年坂）	
12月15日	第2回永青文庫研究センター運営委員会	稲葉・今村
12月16日	県文化振興審議会	稲葉
12月17日	「熊本城と細川家の明治維新」展ギャラ リートーク（於蔦屋書店熊本三年坂）	今村・三澤
12月20日	読売新聞白石氏来訪・取材	今村・三澤
12月22日	山都町教育委員会『通潤橋総合調査報告 書』編集会議	今村
12月22～23日	天草市棚底城整備検討委員会	稲葉
12月27日	玖珠町教育委員会所蔵史料調査	今村
1月1日	「徳川 JAPAN サミット2023」（NHKBS プ レミアム）放送	
1月5日	BS 松竹東急取材（「号外！日本史スカー プ砲」）	稲葉
1月6日	NHK 取材（「英雄たちの選択」）	稲葉
1月12日	人吉市教育委員会打合せ	稲葉
1月18日	NHK 収録（「英雄たちの選択」）	稲葉

日付	活動内容	担当・打合せ先等
1月19日	NHK収録（「英雄たちの選択」）	稲葉
1月19～20日	東京出張、出版社打合せ	稲葉
1月20日	高知県史近世部会（オンライン）	今村
	熊本博物館木山氏来訪、史料貸出	今村
1月20日	熊本近代史研究会例会報告	今村
1月23～27日	松井家文書目録作成調査	参加者：10名
1月27日	熊本市防災講座講演	稲葉
	BS東急インタビュー撮影	稲葉
1月31日	小国町教育委員会所蔵史料貸出	今村・高口（小国町）・木山（熊本博物館）
2月1日	東京出張（永青文庫所蔵史料調査）	今村
	KKT制作部東主任来訪・取材	稲葉
2月2日	長野家所蔵史料貸出	今村
2月3日	熊本県文化財審議会	稲葉
2月6日	熊日あれんじ林記者来訪・取材	稲葉
2月7日	天草市担当者と国史跡棚底城跡整備について打合せ	稲葉
2月8～10日	文化庁による永青文庫史料調査	稲葉・今村・後藤
2月8日	永青文庫細川護光氏、林田氏史料調査視察	稲葉・今村・後藤
2月11日	熊本博物館企画展「熊本城と明治維新」（～3月19日）	
2月12日	八代市澤井家文書調査	今村
2月13日	熊本被災史料レスキューネットワーク事務局会議	稲葉・今村
2月15日	熊本県文化課打合せ	稲葉
2月17日	小倉出張、実地調査	稲葉・後藤
2月18日	企画展解説講座「深掘り！熊本の維新」（於熊本博物館）	今村・三澤
2月21日	宇土城跡整備検討委員会	稲葉
	東京大学史料編纂所杉本科研打合せ（オンライン）	稲葉
2月23日	シンポジウム「道と川の近世領国地域社会」準備会	今村・三澤
	KKT制作部東主任と打合せ	稲葉
	BS松竹東急番組制作打合せ（オンライン）	稲葉
2月28～3月1日	鹿児島出張	稲葉・後藤
3月1日	国際人文社会科学センター運営委員会	稲葉・今村

日付	活動内容	担当・打合せ先等
3月2日	中世佐敷城調査検討委員会	稲葉
3月4日	シンポジウム「道と川の近世領国地域社会」	稲葉・今村・三澤・久留島（歴博）・木越（石川県）・酒井（聖心）・胡（愛媛大）・定兼（岡山県）・矢野（島根県）
3月6～7日	永青文庫初期史料群入替作業	
3月8日	玉名市立歴史博物館こころピア所蔵史料調査	今村・竹田（玉名市）
	肥後水とみどりの愛護基金理事会	稲葉
3月13日	熊本日日新聞鬼東氏来訪・取材	稲葉・今村
3月14日	読売新聞北村氏来訪・取材	稲葉・今村
3月15日	大津町江藤家文書調査	今村
3月16日	甲佐陣内城跡整備活用委員会	稲葉
3月17～19日	高知県出張（高知県史近世部会）	今村
3月19日	菊池一族研究プロジェクト成果発表会	稲葉
	京大岩城氏科研研究会（オンライン）	今村
3月20日	KKT 史料・インタビュー撮影	稲葉・後藤
3月21～22日	東京出張（研究打合せ、北里柴三郎記念室所蔵史料調査）	今村・神谷（横浜開港資料館）・小関（千葉大）・白石（宮内庁）・高槻（神戸大）
3月24日	熊本県文化財復興基金配分委員会	稲葉
3月24～26日	静岡出張（静岡市歴史博物館訪問、静大戸部氏科研シンポジウム）	今村
3月27日	高森町史編集会議（高森町）	稲葉・今村
3月27～30日	東京出張、永青文庫理事会出席・史料調査	稲葉
3月28～30日	東京出張、永青文庫史料調査	後藤
3月28～29日	岡山出張（研究打合せ、津山郷土博物館所蔵史料調査）	今村
3月30日	日印朝科研研究会（オンライン）	稲葉・今村
3月31日	千葉大小関氏科研研究会（オンライン）	今村

2. 年間活動報告

(1) 組織運営

本年度の運営は、主として専任教員の稲葉継陽教授、今村直樹教授が担い、兼務教員として三澤純准教授、安高啓明准教授がこれに協力した。また後藤典子特別研究員が研究・社会発信業務を専任教員と分担し、科学研究費補助金基盤研究（B）（研究代表者・今村）等によって雇用されている大学院生及び学部学生らも、史料のデータ化等の実務にたずさわった。

永青文庫研究センター運営委員会を通じての運営は、おおむね円滑に進められた。

なお、2022年10月24日に熊本県庁で開催された永青文庫常設展示基金活用委員会にて2022年度の事業計画を報告し、あわせて中間報告を行い、承認された。

(2) 研究活動

1) 永青文庫細川家文書の画像データ蓄積と分析

本年度も例年と同様、永青文庫細川家文書の藩政史料について、新たなデータの蓄積を行った。

撮影を実施したのは、奉行所における近世前期の合議記録群「奉行所日帳」や、近世中後期の刑事法制担当部局（刑法方）による年次記録帳簿群「口書」などである。

撮影された画像データは、熊本大学附属図書館貴重資料展などに活用されるとともに、基礎研究の一層の推進のための素材として分析が深められる予定である。

2) 惣庄屋史料古閑家文書の目録作成・画像蓄積作業と共同研究

古閑家文書（古閑孝氏所蔵）は、総点数が20,000万点をこえる熊本藩惣庄屋史料の代表的存在である。2016年4月熊本地震の被災後、熊本被災史料レスキューネットワークにより救出され、現在は熊本大学で保管されている。2019年度、古閑家文書を主たる分析対象とする研究課題「『熊本藩関係貴重資料群』の総合的解析による日本近世の意思決定構造の実証的研究」（研究代表者・今村直樹）が科学研究費補助金基盤研究（B）に採択され、その後の本センターは、①古閑家文書の総合調査、②同文書の画像蓄積作業、③大庄屋（惣庄屋）・組合村などの近世地域行政機構に関する比較共同研究を進めている。

①では、今村と科研費で雇用された大学院社会文化科学教育部及び文学部の学生が古閑家文書の目録作成に従事し、約2,004点の目録を作成することができた。また、目録調書のデータ化作業も進め、本年度は約3,055点の調書データの入力を完了した。これらの作業の結果、5036点分の近世文書の目録データが整うにいった。古閑家文書の基礎研究に基づく成果は、後掲する『永青文庫叢書 細川家文書 災害史料編』や熊本博物館企画展「熊本城と明治維新」などに反映されている。

②では、昨年度に続き、古閑家歴代当主が作成した日記の画像データ蓄積作業を行うことができた。

③では、千葉・岡山・島根・愛媛各県などの研究者とともに、近世の地域行政機構に関する研究会を2022年9月10日に熊本大学文学部で開催した。報告題目は以下の通りである。

三澤 純（熊本大学）

往還と舟運による地域運営—近世後期の在町御船を対象として—

今村直樹（熊本大学）

近代移行期地域社会史研究の現状と論点

3) シンポジウム「道と川の近世領国地域社会」の開催

2) で述べた科研費基盤研究(B)「『熊本藩関係貴重資料群』の総合的解析による日本近世の意思決定構造の実証的研究」は、本年度が最終年度にあたる。そこで、古閑家文書の総合調査および共同研究の成果を総括するシンポジウム「道と川の近世領国地域社会」を、2023年3月4日に熊本大学くすのき会館で開催した。県内のみならず、関東や関西からも日本近世・近代史を専門とする研究者が集まり、活発な議論が行われた。詳細は以下の通りである。

趣旨文

日本近世は開発の時代であった。農業基盤整備のために多くの用水路がつくられるとともに、産物を域外に移出するために往還や舟運などの交通網整備が進められた。このように近世地域社会にとって道と川（水）は普遍的かつ不可欠な構成要素であったが、近年の地域社会論における注目度は必ずしも高いとはいえない。本シンポジウムでは、熊本藩地域行政の要である惣庄屋家に伝来した「古閑家文書」を主な素材として、道と川からみた近世領国地域社会の特質を、幕領や他藩領との比較を交えて明らかにする。

第Ⅰ部 研究報告 13:00-15:20

趣旨説明…今村直樹（熊本大学）

往還と舟運による地域運営…三澤純（熊本大学）

近世後期の河川・用水管理と地域社会…今村直樹（熊本大学）

第Ⅱ部 パネルディスカッション 15:40-17:00

コメント…久留島浩（国立歴史民俗博物館）、矢野健太郎（島根県）

司会進行…稲葉継陽（熊本大学）

個別質疑・総合討論

4) 熊本大学所蔵松井家文書の目録作成・修復作業

熊本大学附属図書館には、熊本藩の第一家老であった松井家に伝来した古文書・古記録（松井家文書）約36,000点が保管されている。本センターは2018年度から、①松井家文書の目録作成、②修復作業に着手している。

①の目録作成では、新型コロナウイルスの感染状況が一定の落ち着きをみたため、センタースタッフのほか学外からの作業従事者も得て、附属図書館で一週間単位の集中調査を6回開催した（総日数30日、延べ人数59人）。その結果、約1,389点の目録を作成することができた。また、目録調書のデータ化作業も進め、今年度は約400点の調書データの入力を完了した。松井家文書の基礎研究に基づく成果は、後掲する『永青文庫叢書 細川家文書 地域行政編』やプ

レスリリース「宮本武蔵晩年の人物像を示す新史料4点を発見」などに反映されている。

②の修復作業では、昨年度、附属図書館から申請された「熊本大学所蔵『熊本藩関係貴重資料群』の修復事業」が第3回三菱財団文化財保存修復事業助成対象に選ばれ、学術的価値が高い松井家文書のうち、保存状態が悪いものの9点の修復を専門業者に依頼していたが、本年度半ばに作業が無事完了した。

これらの作業は、来年度も継続して行っていく予定である。

5) 『永青文庫叢書 細川家文書 災害史料編』の発刊

永青文庫叢書は、永青文庫細川家資料からとくに学術的価値が高い古文書・絵図類を図版入りで紹介するもので、本センターによる研究活動の柱である。本センターは、文学部附属時代の2010年から2014年にかけて第1期の永青文庫叢書を5冊刊行し、2019年からは第2期（全5冊）の刊行に着手していた。本書は、第2期かつ永青文庫叢書シリーズ全体を締めくくる最終巻（10冊目）になる。

江戸時代は、大雨・洪水・地震・虫害といった自然災害と、それに伴って疫病・飢饉などが多発した時代でもある。こうした自然災害はどのような周期で発生していたのか。その被害実態はいかなるものだったのか。また、熊本藩政は地域社会の力に依拠しながら、災害からの復興をどのように進めたのか。本書には、こうした疑問に答えるべく、近世前期・近世後期の二部構成のもと、図版編・翻刻編には小倉藩時代の近世初期から幕末期にかけた災害関係史料121点を、解説編には稲葉継陽「近世前期の災害と藩政」と今村直樹「近世後期史料にみる熊本藩の災害と社会」という2本の論考を収録した。

本書には、本センターが発足当初から総合調査を行ってきた永青文庫資料に加えて、近年新たに調査を進めている松井家文書や古閑家文書からも、多数の未刊行史料を収録している。本書の刊行および全10冊の永青文庫叢書シリーズの完結は、人文社会科学系の学問分野における基礎研究の継続の重要性を直接的に示すものといえよう。

6) 紀要『永青文庫研究』第6号の刊行

本センターは、2017年度から研究紀要『永青文庫研究』を刊行している。本年度の第6号には、永青文庫研究センタースタッフ及び学外の研究者からの寄稿により、研究ノート2本、史料紹介1本、書評1本を収録することができた。

第6号の目次は以下の通りである。

研究ノート

キリシタン重臣加賀山隼人と細川忠興	稲葉 継陽
	後藤 典子
地域史からみた北里柴三郎一小国時代とその周辺	今村 直樹

史料紹介

近世後期における肥後・三池の漁場用益争論（二）	川端 駆
-------------------------	------

書評

熊本大学永青文庫研究センター編『永青文庫叢書 細川家文書 意見書編』	林 千寿
------------------------------------	------

7) 永青文庫細川家資料の重要文化財指定に向けた集中調査

本センターは、熊本大学寄託永青文庫細川家資料（約5万8,800点）の総目録を2015年に刊行した。このうち、『永青文庫叢書 細川家文書 中世編』（吉川弘文館、2010年）で紹介された信長発給文書をはじめとする中世文書266通は、2013年6月に国の重要文化財に指定された。しかし、それを除いた資料群の大部分は未指定である。そのため、近い将来の重要文化財指定に向けた永青文庫資料の集中調査（総目録と原資料との照合作業）が、文化庁の指導のもと、本年度から始められることとなった。

本年度の集中調査は、2022年8月（17日～19日）と2023年2月（8日～10日）の2度開催された。文化庁、公益財団法人永青文庫、熊本県文化課などの関係者が参加し、前者の調査では総目録の4093点分、後者では3350点分について、原資料との照合作業を終えることができた。

この調査は、来年度以降も継続して行われる予定である。

(3) 展覧会・講演会・社会貢献等

1) 第37回 熊本大学附属図書館貴重資料展「悲劇の藩主細川光尚」

（2022年11月3～5日、附属図書館と共催 於熊本大学附属図書館）

2) 第16回 永青文庫セミナー

（2021年11月公開、附属図書館と共催 於熊本大学附属図書館）

講演：稲葉継陽「細川光尚とその時代—天草島原一揆・寛永大飢饉・御国返上—」

本年の貴重資料展及び永青文庫セミナーは、3年ぶりに対面での開催が実現した。

元和5年（1619）、明君・細川忠利（1586-1641）の嫡男に生まれ、藩主になることを約束されて江戸で育った光尚は、寛永14年（1637）、天草のキリシタン一揆を討つため、初めて肥後に下る。一揆への対応、父の急死、寛永大飢饉への対処、天草・島原の戦後復興、ポルトガル船来航に対応するための天草在番や長崎出兵、熊本藩の財政破綻と百姓経営の危機。重い持病を抱えながら、光尚は17世紀最大の危機の時代の諸課題に正面から取り組むも、慶安2年（1649）、わずか31歳で失意のうちに病にたおれる。

本展は、いままであまり注目されることのなかった光尚の活動を示す数々の貴重資料を、光尚の指南役だった沢庵和尚の自筆書状や、宮本武蔵に関する新発見資料とともに公開した。

1) 貴重資料展の来展者数は3日間で377名、うち大学関係者を除く一般市民は193名であった。2) 永青文庫セミナーの参加者は119名であった。

3) 熊本大学×ニューコ・ワン共同企画「熊本城と細川家の明治維新」の開催（2022年12月14日～12月20日、蔦屋書店熊本三年坂）

蔦屋書店の運営会社である（株）ニューコ・ワンとの共同企画で、熊本大学広報戦略室の肝いりにより、2020年度から開催している市民向けのイベントである。

蔦屋書店熊本三年坂の地下スペースで、当センターの研究成果のパネル展示、関連書籍等の展示販売を行うとともに、12月17日には展示担当者による下記のトークイベントを開催した。

①熊本城廃毀申請書の政治的意味…三澤純

②熊本藩庁文書と細川家甲冑の明治維新…今村直樹

本イベントは、熊本日日新聞社、テレビ熊本で紹介されるとともに、7日間で約4000名の来訪があった。

4) 企画展「熊本城と明治維新 藩から県へ、そのとき城は？」への特別協力（2023年2月11日～3月19日、熊本博物館）

熊本城は加藤清正が築城した天下の名城であり、寛永9年（1632）以降は、熊本藩細川家の軍事的・政治的拠点として機能した。しかし、明治維新という巨大な変革は、近世城郭や大名家のあり方に大きな変化をもたらし、廃藩後、諸大名は城からの退去を余儀なくされる。それでは、明治維新によって熊本城や細川家はいかなる変容を迫られたのだろうか。また、江戸時代の熊本城内で保管されていた甲冑や古文書の行方とは。

本展は、知られざる熊本の明治維新を、多くの初公開資料を含んだ古文書や絵図から明らかにするもので、熊本博物館、熊本大学永青文庫研究センター、熊本大学附属図書館の三機関が連携して開催する、初めての企画展である。永青文庫資料・松井家文書・古閑家文書のほか、本センターが2019年に購入し、基礎研究を進めてきた熊本藩士幸家文書からも多くの古文書が出品された。

本展は、熊本日日新聞社、読売新聞社、西日本新聞社で紹介されるとともに、2023年3月8日時点で5,164人の来場者があった。

5) 企画展「八代築城400年記念 八代の歴史と文化31 町人と百姓の江戸時代—私たちの歴史がここにある—」への企画協力（2022年10月21日～11月27日、八代市立博物館未来の森ミュージアム）

八代市立博物館未来の森ミュージアムの秋季特別展覧会は、八代の歴史と文化を日本の文化史全体の流れの中で考える企画展として連年開催されている。その31回目となる本展は、江戸時代の町人と百姓をテーマに企画された。

江戸時代中期（18世紀）、八代地域には、5,000人あまりの町人と47,000人あまりの百姓が暮らしていた。八代城下に住む町人は、港町の利点を生かして廻船業などの商売を行い、地域に富をもたらした。村に住む百姓は、さまざまな農作物を生産したり、造酒業などの商売に挑戦したりして、自らの生活を豊かにした。

本展では、熊本県内に残る古文書、絵画などの諸資料によりながら、八代に生きた町人と百姓の活動を紹介された。永青文庫研究センター編『永青文庫叢書 細川家文書 意見書編』に収録された史料も展示され、稲葉・今村が図録原稿の執筆と特別講演で協力した。

6) 熊本大学広報戦略室を通じた研究成果の記者発表

コロナ禍による講演会等の中止が続いた2020年度以降、本センターは最新の研究成果を発信する手段として、熊本大学広報戦略室を通じたマスコミへの公式発表と熊本大学HPへの掲載、zoomを活用した記者会見を実施している。本年度は、以下の2件を発表することができた。

①と②の発表内容は本年報の巻末に収録しているが、いずれも新聞で報道され、とくに②の

宮本武蔵の新史料は大きな反響を呼び、全国の新聞21紙で取り上げられることとなった。本センターの基礎研究によって得られた新発見、新知見を社会一般に周知する上で有効な手段として、今後も取り組みを続けていきたい。

- ①「青年期の北里柴三郎に関する重要史料を発見」(2022年5月16日)
- ②「宮本武蔵晩年の人物像を示す新史料4点を発見」(2022年9月15日)

(4) センターの運営資金

本年度の永青文庫研究センターの運営資金は、主に以下の事業費等によった。

- 1) 熊本大学 概算要求機能強化促進分プロジェクト経費「熊本藩大名家資料群の総合的分析による日本近世史研究拠点・歴史文化情報発信拠点の発展」
- 2) 日本学術振興会 科学研究費補助金基盤研究(B)
- 3) 熊本大学 学長裁量経費

3. 個人年間活動

稲葉継陽

各種外部委員

人吉市指定文化財等保存活用専門会議（人吉城跡部会）専門指導員、佐敷城跡調査検討委員（芦北町）、宇土城跡調査検討委員、菊之城史跡調査検討委員（菊池市）、国史跡棚底城跡整備検討委員（天草市）、高森町史編纂委員、公益財団法人肥後の水とみどりの愛護基金理事、永青文庫常設展示振興基金運営委員（熊本県教育庁文化課）、熊本県文化財保護審議委員、熊本県文化振興審議会委員、放送大学熊本学習センター客員教授

論文

- ・「天下泰平と百姓鉄炮―八代・葦北郡をめぐって―」（八代城築城400年記念・令和4年度秋季特別展覧会・八代の歴史と文化31『町人と百姓の江戸時代』八代市立未来の森ミュージアム、2022年10月、117-122頁）
- ・「藤木史学における村と平和―戦後思想との関係で―」（稲葉継陽・清水克行編『村と民衆の戦国時代史―藤木久志の歴史学―』勉誠出版、2022年10月、118-131頁）
- ・「近世前期の災害と藩政」（熊本大学永青文庫研究センター編『永青文庫叢書 細川家文書 災害史料編』吉川弘文館、2023年3月、343-361頁）
- ・「細川家キリシタン重臣加賀山隼人と細川忠興」（後藤典子と共著、『永青文庫研究』6、2023年3月、1-23頁）
- ・「文献史料からみた菊池氏」（菊池市教育委員会『北宮館跡・北宮神社 総括報告書』2023年3月）

書評

- ・「書評 高木純一著『中世後期の京郊荘園村落』」（『ヒストリア』293、2023年8月、51-59頁）

編著書

- ・『村と民衆の戦国時代史―藤木久志の歴史学―』（清水克行と共編著、勉誠出版、2022年10月、全270頁）

研究発表

2022年9月23日 中世後期から近世初頭における武家拠点形成の研究 熊本研究集会（科学研究費補助金基盤研究（B）研究代表者：仁木宏）
タイトル「室町期守護菊池氏の権力とその拠点」

学術的著述

（展覧会解説目録）

「第37回 熊本大学附属図書館貴重資料展 悲劇の藩主 細川光尚 解説目録」（後藤典子と共著、2022年11月、全21頁）

（雑誌連載）

「永青文庫 歴史万華鏡」（85）～（96）（『阿蘇』1080-1091号、2022年4月-2023年3月）

（新聞連載）

「細川キリシタン群像」（1）～（3）（『熊本日日新聞』2023年1-3月）

講演等

(講演)

- 2022年4月25日 南阿蘇村正教寺檀家総会
タイトル「正教寺楼門の歴史的・文化的価値について」(南阿蘇村正教寺)
- 2022年6月17日 一般社団法人文化財保存修復学会 第44回大会
シンポジウム「これからの文化財防災を考える―熊本地震と令和2年7月豪雨の経験から―」
タイトル「熊本地震後の文化財保護―その経験と学び―」(熊本県立美術館)
- 2022年8月6日 放送大学熊本学習センター 2022年度公開講演会
タイトル「天下泰平を支えた先人たち―その言葉に学ぶ―」(放送大学熊本学習センター)
- 2022年11月3日 第16回 永青文庫セミナー
タイトル「細川光尚とその時代―天草島原一揆・寛永大飢饉・御国返上―」(熊本大学附属図書館)
- 2022年11月5日 八代市立博物館未来の森ミュージアム「八代城築城400年記念 令和4年度秋季特別展覧会《八代の歴史と文化31》町人と百姓の江戸時代～私たちの歴史がここにある」関連講演
タイトル「江戸時代における戦争と平和―国境の城、庄屋、村の武力―」(八代市立博物館未来の森ミュージアム)
- 2022年11月12日 里山ギャラリー歴史・文化講座
タイトル「江戸時代 民衆の武器と平和―肥後国の百姓鉄炮を通じて―」(肥後銀行本店ホール)
- 2022年11月23日 2022年度記録史料保存セミナー(主催:大分県歴史資料保存活用連絡協議会・別府大学アーカイブズセンター)
タイトル「熊本地震後の文化財保護―その経験と学び―」(大分県立図書館)
- 2022年3月2日 そなえる防災講座(主催:熊本市中央区役所総務企画課)
タイトル「歴史資料から見る熊本の災害」(熊本市中央公民館)
- 2022年12月4日 第279回肥後考古学会例会シンポジウム「島津氏・龍造寺氏の肥後進攻と城」コーディネーター(宇城市豊野防災拠点センター)

(ギャラリートーク)

- 2022年12月1日 2022年度熊本大学キャンパスミュージアム企画展示「見よ、クマダイ研究力!―ケンキュウって面白い―」
タイトル「1620年代 細川家の葡萄酒製造とその背景」(後藤典子と共演)

(記者発表)

- 2022年9月26日 「宮本武蔵晩年の人物像を示す新史料4点を発見」(熊本大学)

(テレビ番組制作協力)

2023年1月1日 「徳川 JAPAN サミット2023」(NHK BS プレミアム、BS 4K)

2023年3月15日 「英雄たちの選択 細川幽斎」(NHK BS プレミアム、BS 4K)

2023年3月19日 「号外! 日本史スクープ砲 宮本武蔵」(BS 松竹東急)

今村直樹

各種委員会

宇土市高月邸保存活用検討会委員、宇土市歴史的資料保存活用事業運営委員会委員、菊陽町文化財保護委員、高森町史編纂委員、竹田市納池公園名勝地調査委員、新修豊田市史編さん委員会執筆協力員、高知県史編さん専門部会(近世部会)委員、伊豆の国市史跡等整備調査委員会委員

論文等

- ・「書評 三村昌司著『日本近代社会形成史：議場・政党・名望家』」(『年報近現代史研究』14、2022年5月、pp.53-60)
- ・「葦北・八代の惣庄屋・庄屋・在御家人」(『町人と百姓の江戸時代～私たちの歴史がここにある～』八代市立博物館未来の森ミュージアム、2022年10月、pp.123-127)
- ・「近世後期史料にみる熊本藩の災害と社会」(熊本大学永青文庫研究センター編『永青文庫叢書 細川家文書 災害史料編』吉川弘文館、2023年2月、pp.362-382)
- ・「熊本県の初代県知事『安岡良亮』」(『さわやか』97、熊本さわやか長寿財団、2023年3月、pp.16-17)
- ・「地域史からみた北里柴三郎—小国時代とその周辺—」(『永青文庫研究』6、2023年3月、pp.25-40)
- ・「幕末維新时期熊本藩の茶生産と地域社会」(『グローバルな視野からとらえた日本の茶と茶文化に関する学問横断的研究〔アジア研究・別冊〕』2023年3月刊行予定)

研究発表

- ・「明治零年代の旧藩主家と旧藩地—熊本洋学校問題を事例に—」(大名華族研究会、2022年8月13日、オンライン開催)
- ・「近代移行期地域社会史研究の現状と論点」(科研費研究会、2022年9月10日、熊本大学文学部)
- ・「明治零年代の旧藩主家と旧藩地・旧藩士族—旧熊本藩を事例に—」(熊本歴史学研究会、2022年11月26日、熊本市健軍文化ホール)
- ・「近代移行期の『地域資産』をめぐる論点」(日本史研究会12月例会、2022年12月10日、オンライン開催)
- ・「熊本県令安岡良亮と幡多人脈」(熊本近代史研究会1月例会、2023年1月21日、市民会館シアーズホーム夢ホール)
- ・「近世後期の河川・用水管理と地域社会」(シンポジウム「道と川の近世領国地域社会」、2023年3月4日、熊本大学くすのき会館)
- ・「旧熊本藩主細川護久と西南戦争」(大名華族研究会、2023年3月18日、オンライン開催)

講演等

- ・「日本近世の地域行政と明治維新」(放送大学面接授業、2022年5月14・15日、放送大学熊本学習センター)
- ・「18-19世紀日本の地域行財政—熊本藩の手永・惣庄屋制を事例に一」(慶應義塾大学大学院経済学研究科「経済史演習」外部講師、2022年5月19日、オンライン開催)
- ・「文化財レスキューと社会還元—熊本被災史料レスキューネットワークの取り組みから—」(文化財保存修復学会公開シンポジウム「これからの文化財防災を考える」、2022年6月17日、熊本県立美術館)
- ・「熊本藩の手永・惣庄屋制と地域社会」(熊本さわやか大学校、2022年8月4日、熊本県総合福祉センター)
- ・「熊本城と細川家の明治維新」(天草さわやか大学、2022年8月23日、天草市複合施設こころす)
- ・「熊本藩の手永・惣庄屋制と地域社会」(熊本さわやか大学校、2022年10月18日、桜十字ホールやつしろ)
- ・「近世白川の分水問題と流域社会」(里山ギャラリー—歴史・文化講座、2022年10月29日、肥後銀行本店ビル)
- ・「地域史からみた北里柴三郎—小国町町政史料における新発見文書の意義—」(阿蘇郡市文化財保護委員等研修会、2022年11月9日、おぐに町民センター)
- ・「八代・葦北の惣庄屋と在御家人」(「町人と百姓の江戸時代」特別講演会、2022年11月12日、八代市立博物館未来の森ミュージアム)
- ・「熊本藩の地域経済と河川舟運」(熊本県文化財保護大会基調講演、2022年11月14日、熊本県庁)
- ・「熊本県令安岡良亮と幡多の群像」(予土歴史文化研究会郷土歴史講座、2022年11月19日、四万十市立文化センター〔高知県〕)
- ・「細川重賢と宝暦の改革」(熊本さわやか大学校大学院、2022年12月9日、熊本県総合福祉センター)
- ・「熊本藩庁文書と細川家甲冑の明治維新」(「熊本城と細川家の明治維新」展トークイベント、2022年12月17日、蔦屋書店熊本三年坂)
- ・「明治前期の旧熊本藩主細川家と旧藩地」(解説講座「深堀り!熊本の維新」、2023年2月18日、熊本博物館)
- ・「古文書を読む」熊日生涯学習プラザカルチャー講座、2022年度毎月第1・第3月曜日、びぶれす熊日会館(熊本市中央区)

後藤典子

論文

- ・「細川家キリシタン重臣加賀山隼人と細川忠興」(稲葉継陽と共著、『永青文庫研究』6、2023年3月、1-23頁)

展覧会解説目録

- ・「第37回 熊本大学附属図書館貴重資料展 悲劇の藩主 細川光尚 解説目録」(稲葉継陽と共著、2022年11月、全21頁)

ギャラリートーク

- 2022年12月1日 2022年度熊本大学キャンパスミュージアム企画展示「見よ、クマダイ研究力！ーケンキュウって面白いー」
タイトル「1620年代 細川家の葡萄酒製造とその背景」(稲葉継陽と共演)

記者発表

- 2022年9月26日 「宮本武蔵晩年の人物像を示す新史料4点を発見」(熊本大学)

日高愛子

著書

- ・共編『和学知辺草』(文学通信、2023年3月)

研究発表

- ・「久我美子の紀行文と和歌」第138回和歌文学会関西例会 2022年4月23日、京都産業大学壬生校地むすびわざ館
- ・「近世大名の女性文芸ー肥後細川家を例として」東アジア日本研究者協議会第6回国際学術大会、2022年11月5日、北京外国語大学(オンライン)
- ・「近世肥後の文事ー細川就を中心に」令和4年度熊本大学国語国文学会、2022年11月12日、オンライン開催
- ・「細川就の文化活動」第66回古典研究会、2022年12月25日、広島大学(オンライン)

三澤 純

各種委員会

熊本市町界町名審議会委員長、くまもと文学・歴史館協議会委員、御船町文化財保護委員

研究発表

- ・「熊本城廃棄申請書の成立事情と『御城拝見』」、2022年8月13日、熊本近代史研究会、熊本市民会館
- ・「往還と舟運による地域運営ー近世後期の在町御船を対象としてー」、基盤研究(B)「『熊本藩関係貴重資料群』の総合的解析による日本近世の意思決定構造の実証的研究」研究会、2022年9月10日、熊本大学黒髪キャンパス
- ・「熊本藩の在中瓦葺建築禁止令と江藤家住宅」、2022年12月3日、熊本史学会2022年度秋季研究発表大会、熊本県立図書館大研修室

講演

- ・「『食糧』から見る近代日本の戦争」、2022年10月14日、熊本市立必由館高等学校

安高啓明

各種委員会

大田区立勝海舟記念館資料調査委員会委員長、八代市立博物館未来の森ミュージアム協議会委員、天草市立キリシタン資料館運営委員会委員長、上天草市歴史資料室基本計画策定委員、南島原市有馬キリシタン遺産記念館資料収集検討委員会委員、南島原市フィールドミュージアム基本計画策定事業プロポーサル審査委員会委員

著書

- ・単編『長崎と天草の潜伏キリシタン－「禁教社会」の新見地』（雄山閣、2023年1月）
- ・監修『潜伏キリシタン社会と“類族”』（天草市・天草市立キリシタン資料館、2022年11月）

論文・史料紹介・書評等

- ・単著「熊本藩の同国意識と藩法形成―幕領天草を事例に」（『汲古』第82号、2022年12月）
- ・単著「潜伏キリシタン社会の構造―天草における類族の管理を通じて」（『潜伏キリシタン社会と“類族”』（天草市・天草市立キリシタン資料館、2022年11月）
- ・単著「書評 高塩博『近世諸藩の法と刑罰』（『日本歴史』第896号、2023年1月）

講演・学会

- ・「島原天草一揆とキリシタン」熊本県立上天草高校、2022年7月7日
- ・「肥後・天草のキリシタン史と潜伏キリシタン」里山ギャラリー歴史・文化講座 肥後の里山ギャラリー、2022年10月15日
- ・「キリスト教禁教政策と踏絵」佐賀県立鳥栖高校ジョイントセミナー、2022年10月21日
- ・「犯科帳の世界」NBC ユウガク、2022年10月26日
- ・「古文書から読み解くキリシタンの歴史」天草市立ロザリオ館、2022年11月19日
- ・「長崎奉行のキリシタン取り締まりと五島禁教史の系譜」専修大学人文科学研究所、2022年12月20日
- ・「砥岐組大庄屋藤田家文書の文化財的価値」天草郡市文化財保護委員研修会、2023年1月30日
- ・「古文書から見る島原大変肥後迷惑」天草市立本渡歴史民俗資料館特別展・歴史資料でみる天草の災害展・天草市民センター、2023年2月23日
- ・「古文書入門」熊本市東部公民会自治会、2022年度毎月第1・第3水曜日
- ・「古文書を読む」NHK カルチャー熊本教室、2022年度毎月第1・3金曜日
- ・「古文書で読む肥後・天草キリシタン史」NHK カルチャー熊本教室、2022年度毎月第2金曜日

4. 記者発表要旨

- (1) 青年期の北里柴三郎に関する重要史料を発見
- (2) 宮本武蔵晩年の人物像を示す新史料4点を発見

報道機関 各位

熊本大学

青年期の北里柴三郎に関する重要史料を発見

(ポイント)

- 世界的な細菌学者である北里柴三郎^{きたさとしばさぶろう}（1853-1931）が、青年期に小国郷（現阿蘇郡小国町・南小国町）の教師と役所の見習に採用されていたことを示す記録（辞令の控え）が、小国町教育委員会所蔵の「小国町町政史料」から発見されました。
- この新出史料は、柴三郎の履歴の空白部分を埋めるとともに、当時は軍人を志望していた柴三郎に、医学の道へ進路変更する人生の転機をもたらしたものとして、重要な意味をもつと考えられます。

(概要説明)

熊本大学永青文庫研究センターの今村直樹准教授と小国町教育委員会は、当時17歳であった北里柴三郎が、明治3年8月に小国郷の教師と役所の見習に採用されたことを示す辞令（控え）を発見しました。これは、当時の柴三郎の進路に地元の教師が想定されていたことを明らかにするとともに、のちに彼に医学の道へ進路変更する転機^{やすだたいぞう}をもたらした人物（安田退三）との出会いを意味する、重要な史料と考えられます。

(記者発表について)

本研究成果について、Zoomを利用して詳細を説明する機会を以下のとおり設けます。参加を希望される場合は、熊本大学総務部総務課広報戦略室まで、メール（sos-koho@jimu.kumamoto-u.ac.jp）でご所属とお名前をご連絡ください。折り返し詳細をご連絡いたします。

〈日時〉 令和4年5月27日（金）10:00～11:00

※恐れ入りますが、準備の都合上、5月26日（木）17:00までにご連絡いただきますようお願いいたします。

(説明)

[背景]

のちに世界的な細菌学者となる北里柴三郎は、嘉永5年12月20日（1853年1月29日）、阿蘇郡小国郷の村庄屋の長男として生まれました。青年期、軍人を志望していた彼は、明治2年（1869）12月に熊本藩の藩校時習館じしゅうかんに入寮し、翌3年7月に時習館が廃止されると小国にいったん帰郷します。その後、翌4年2月に同藩が新設した西洋医学所せいよういがくしよ（古城医学校ふるしろいがっこう※）に入学し、そこでオランダ人医師マンスフェルトの指導を受け、医学を本格的に志したことが一般的に知られています。

他方、柴三郎の最も古い伝記である宮島幹之助編『北里柴三郎伝』（北里研究所、1932年）には、時習館廃止後に彼が帰郷した際、両親や親戚たちが地元の教師になるように強く勧めたこと、また、その後の数か月間、彼は小国郷の行政担当者であった熊本藩士安田退三の家に書生として寄宿し、安田夫妻の薫陶を受けたことで軍人志望を捨て、医学校に入学することになったエピソードが記されています。しかし、時習館廃止後から医学校入学までの柴三郎の動向を示す史料は極めて少なく、上述した両親たちの勧めや、安田との関係についても、史料上では未確認のままでした。

[研究の内容]

今回発見された辞令は、江戸時代後期から昭和期にかけての小国町域の行政史料群「小国町町政史料」における、「明治二年 選挙一卷」という冊子から発見されたものです。「明治二年 選挙一卷」は、明治2年から同5年3月までの小国郷における人事関係記録をまとめたもので、役人・神官・僧侶などの任免や、それに係る関係書類が収録されています。

辞令は、時習館の廃止後、柴三郎が帰郷していた明治3年8月26日付のものです。その内容は、芝（柴）三郎を、小国郷の「教導師きょうどうし」であった鈴木諫太郎の後任とともに、「大属小国詰所だいぞくおぐにつめしよ」の見習いに採用し、出勤中は飯米を支給するというものです。「教導師」とは、江戸時代から小国郷宮原みやのはるにあった郷校「筑紫学舎ちくしがくしゃ」の教員をさし、「大属小国詰所」とは、熊本藩領であった豊後国久住と小国を管轄した行政担当者（郡政大属ぐんせいだいぞく）の小国出張所を意味しています。当時、小国・久住の郡政大属を務めていたのが、前述の安田退三でした。

以下、新発見の柴三郎宛辞令の解説文と現代語訳です。

【解説文】

北里芝三郎

其方儀、小国郷教導師鈴木諫太郎跡教方持継、且大属小国詰所見習として召仕候ニ付、出勤中飯米被渡下候事、

明治三年

八月廿六日

【現代語訳】

北里芝三郎

其方を、小国郷の教導師である鈴木諫太郎の後任として、かつ大属小国詰所の見習として採用する。出勤中は飯米を支給する。

明治三年

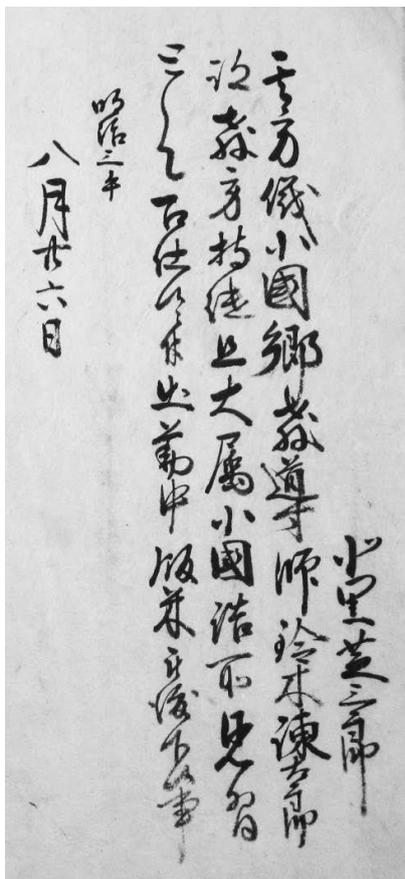
八月二十六日

[意義]

- 1、明治3年7月の時習館廃止後から、明治4年2月の医学校入学までの柴三郎の動向を示す史料は極めて少なく、前掲『北里柴三郎伝』に記述があるものの、同書では出典が明記されていないため、その真偽を確認することができませんでした。しかし、今回の新発見史料により、空白となっていた明治3年の柴三郎の履歴が埋まるとともに、『北里柴三郎伝』の記述に一定の信頼性が置けることが明らかになりました。
- 2、前掲『北里柴三郎伝』によれば、時習館の廃止後、帰郷した柴三郎に対して、両親や親戚は、長男であるがゆえに地元に残り、教師となるように勧めたと記されています。今回の発見は、実際に柴三郎が教師に採用された事実を明らかにするとともに、その採用に両親や親戚たちが関わっていた可能性を示唆するものです。また、当時の柴三郎の進路に、地元の教師が想定されていた事実が解明された点も重要です。
- 3、前掲『北里柴三郎伝』によれば、柴三郎が軍人志望を捨て、医学校に入学することになったのは、安田退三の影響が大きいとされています。今回の発見は、小国における柴三郎と安田との出会いを裏付けるとともに、世界的な細菌学者となった柴三郎の人生の転機を示す重要な史料として、注目されるべきものです。

[用語解説]

※ 古城医学校…熊本県最初の西洋医学校。熊本洋学校と並んで、古城（現熊本県立第一高等学校）の地にあった。明治3年10月に開院式をあげ、翌4年1月に生徒募集を行った。オランダ海軍の軍医であったマンスフェルトたちが教師となり、北里柴三郎、緒方正規、濱田玄達など、後の日本医学界を担う人びとを輩出した。



(左)北里柴(芝)三郎辞令控

(「明治二年 選挙一卷」小国町教育委員会所蔵)

(下)古城医学校時代の職員及び生徒

(写真提供:学校法人北里研究所北里柴三郎記念室)

中央の外国人教師がマンスフェルト、その向かって左が北里。

※無断で転載・転用・複写・複製を禁ずる。



***永青文庫研究センター**

熊本大学には、「永青文庫細川家資料」（約 58,000 点）や細川家の第一家老の文書「松井家文書」（約 36,000 点）の他、家臣家や庄屋層の文書群計 10 万点あまりが寄託・所蔵されており、永青文庫研究センターではこれらの資料群について調査分析を行っています。

【お問い合わせ先】

熊本大学永青文庫研究センター

担当：（准教授）今村 直樹

電話：096-342-2304

e-mail：eiseiken✉kumamoto-u.ac.jp

【解禁日時】

令和4年9月26日(月) 12時



令和4年9月15日

報道機関 各位

熊本大学

宮本武蔵晩年の人物像を示す新史料4点を発見

(ポイント)

- 宮本武蔵に関する一次史料を新たに4点発見した。
- 寛永17年11月の山鹿御茶屋に、武蔵と足利道鑑のほかには武士の津川四郎右衛門、儒学者の朝山意林庵が呼ばれていたことや、武蔵が茶人桑山宗仙の孫と懇意であったことから、“文化人サークル”の一員としての武蔵の姿が明らかになった。
- 新藩主細川光尚との関係性を示す史料から、『五輪書』執筆開始時の光尚と武蔵の関係が明瞭になった。

(概要説明)

宮本武蔵(?—1645)に関する確かな歴史資料(一次史料)は、その晩年にあたる寛永17年(1640)に熊本藩主細川忠利(1583—1641)に招かれて以降のものが、ごく僅かに伝来しているだけです。今回、熊本大学永青文庫研究センターの稲葉継陽教授、後藤典子特別研究員らは、細川家の古文書群(公益財団法人永青文庫所蔵、熊本大学寄託)の中から3点、第一家老の松井家の古文書群(熊本大学所蔵松井家文書)から1点、合計4点の史料を新たに発見しました。新発見史料の概要は以下のとおりです。

- (1) 4点のうち2点(新史料1、2 永青文庫細川家資料)は、寛永17年11月に、忠利が肥後国山鹿(現熊本県山鹿市)の御茶屋(江戸時代の藩主や幕府の役人が参勤交代などに際して休息・宿泊した施設)へ武蔵とともに呼んだ3人の人物の名前が明記されているもので、忠利の命令を奉行所から担当役人に伝達する惣奉行衆の書状控えの分厚い冊子の中から発見されました。3人は、足利道鑑、津川四郎右衛門、朝山意林庵で、足利道鑑以外の2人は今回の史料により初めて明らかになりました。
- (2) もう1点(新史料3 熊本大学所蔵松井家文書)は、寛永19年閏9月に細川家第一家老の松井興長が細川家の大坂留守居下村五兵衛に宛てた書状の控えで、茶人桑山宗仙(1560—1632)の孫の桑山作右衛門と、武蔵が熊本で懇意にしていたことを示しています。
- (3) 4点目(新史料4 永青文庫細川家資料)は、細川忠利の跡を継いだ藩主細川光尚が江戸から国元に出した書状の控えの分厚い冊子の中から発見されたものです。寛永20年9月、光尚は江戸から武蔵に書状を出し、体調を気遣うとともに、来春熊本に戻ったら対面して話そう、と伝えています。

以上の新発見史料4点から、以下のことが明確になりました。

- (a) 晩年の忠利は、寛永17年に自らの政治思想を総括・体系化するために、武家故実（武家の行動を律する歴史的規範）、儒学（東アジア共通の統治思想）、そして兵法、あるいは茶の湯にわたる、文化人たちを集めました。武蔵はいわば思想としての兵法の体現者として招聘されたものと考えられます。
- (b) 寛永18年3月の忠利死去後も、武蔵は熊本で文化人集団の中に身を置きながら、新藩主光尚とも良好な関係にありました。これは、寛永20年10月からの『五輪書』の執筆の背景を、より具体的に示してくれる事実です。
- (c) 忠利が熊本に招聘した人々の履歴や文化的位置からみて、晩年の武蔵が兵法の大家として相当の評価を得ており、細川忠利のような明君と評価された大名の政治思想に大きな影響を与えうる存在であったことが明確になりました。

（説明）

〔概要〕

宮本武蔵（?—1645）に関する一次史料は、その晩年にあたる寛永17年（1640）に熊本藩主細川忠利（1583—1641）に招かれてからのものが、ごく僅かに伝来しているだけで、一次史料の不足は武蔵研究の大きな障壁となっています。そうした中で、今回、熊本大学永青文庫研究センターの稲葉継陽教授、後藤典子特別研究員らが、宮本武蔵晩年の人物像を示す新史料4点を発見、調査しました。

今回発見したのは、寛永17年（1640）から同20年（1643）までのもので、熊本藩主細川光尚、細川家第一家老松井興長、それに熊本藩惣奉行衆が出した書状の控えです。

これらによれば、寛永17年、武蔵は藩主細川忠利によって、兵法家として、武家故実、儒学の第一人者たちとともに熊本に招聘されたこと、したがって武蔵がいわば思想としての兵法の体現者として高く評価されていたこと、さらに忠利の死後も、熊本で文化人集団の中に身を置いていて、新藩主細川光尚との関係も極めて良好であり、それが熊本での『五輪書』の執筆へとつながっていった事情が浮かび上がってきました。

〔発見から発表までの経緯〕

熊本大学が所蔵する「松井家文書」は、細川家第一家老の松井家に蓄積された3万6,000点にも及ぶ歴史資料群で、戦後、熊本大学に移管されました。永青文庫研究センターでは、2017年度以来、本史料群の本格的な目録作成調査と修復及び画像データ化を進めています。新史料3は、その過程で2018年に発見・解読された史料のうち的一点であり、傷みがひどかったため2019年度に修復を施し、展示可能な状態にまで甦りました。

本史料について検討を進める過程で、後藤典子特別研究員は、永青文庫細川家資料（熊本大学寄託、総点数57,000点）に含まれる分厚い冊子体史料を調査し、武蔵に関する3点の新史料を発見しました。それらが新史料1、2、4です。

新発見の4点の内容が、晩年の武蔵を考える上で、一連の検討に値するものであることがわかり、発表に至りました。

[本史料の背景]

島原・天草一揆での戦いを経て、いわゆる鎖国体制の確立段階に至った寛永 17 年（1640）、江戸にあった明君細川忠利は、将軍家兵法指南役の柳生但馬守や、将軍家光や天皇に禅を講義した沢庵和尚との交流を深め、同年 5 月 18 日に江戸を発ち、6 月 12 日には熊本に帰着します。忠利に招かれ、武蔵は寛永 17 年 7 月に肥後にやって来ます。

忠利が寛永 18 年 3 月に死去した後も、武蔵は細川家客分として新藩主細川光尚から変わらない処遇を受け、正保 2 年（1645）5 月、武蔵は熊本で死去します。武蔵が晩年に著した『五輪書』の執筆は光尚の求めによるとの説もあります。

[本史料の内容]

まず、今回発見された 4 点の史料に登場する人物を紹介しておきます。

足利道鑑（尾池義辰）…？—1642？ 足利 13 代将軍義輝の遺児とされる。道鑑の息子らは寛永 14 年（1637）に細川家に仕え、その後、道鑑自身も細川家に客分として迎えらる。寛永 17 年 2 月には道鑑の妻が大坂から熊本に引っ越してきている。寛永 19 年 12 月頃没。

津川四郎右衛門（津川辰珍）…1583—？ もとの尾張国守護で信長の織田家の主家にあたる斯波家の子孫。小倉藩主時代の忠利に呼ばれて客分となり、肥後で知行 1,250 石の家臣となる。辰珍の名乗りは足利道鑑（義辰）の一字を頂戴したとの説がある。

朝山意林庵…1589—1664 江戸時代前期の儒学者。祖父は織田政権で活躍した朝山日乗。朝鮮の儒学者李文長の学統をうける。李文長は細川忠利や沢庵和尚とも交流があった。寛永 11 年（1634）からは細川忠利より在京経費の支給をうけ、上方と熊本とを往来。寛永 15 年には儒教思想や政治・道徳論を説いた仮名草子『清水物語』を出版してベストセラーとなる。のち承応 2 年（1653）には後光明天皇に進講する。弟の朝山斎助は忠利・光尚に仕えた。

桑山作右衛門…？—？ 細川三斎（忠興 1563—1646）とも懇意だった利休直系の茶人桑山宗仙（1560—1632）の孫で、桑山作左衛門（理斎）の子。理斎は忠利とも親しかった。桑山氏は尾張の秀吉直臣出身。寛永 17 年 8 月、忠利は奈良にいた理斎の子息作右衛門を預かって熊本に下向させ、客分として米 500 石を支給した。しかし寛永 19 年閏 9 月 8 日に、山鹿温泉から出奔してしまう。

新史料 4 点の内容（大意）は、以下のとおりです。

（出典 新史料 1、2、4：永青文庫細川家資料 新史料 3：熊本大学所蔵松井家文書）

○新史料 1（寛永 17 年）10 月 29 日 細川家惣奉行衆書状控 忠利側近 3 名宛

来月 3 日から忠利様が山鹿御茶屋に逗留されるので、（足利）道鑑様、（津川）四郎右衛門殿、（朝山）意林庵、（宮本）武蔵、この御衆中に山鹿へ参上するよう命じよとの忠利様のご意向である。この旨、惣奉行衆として了解した。命令文書のとおり担当者に通達した。

○新史料 2（寛永 17 年）11 月 5 日 細川家惣奉行衆書状控 担当奉行 3 名宛

道鑑様、意林庵、武蔵の山鹿での御宿へ、すべてのお世話に必要な物品を滞りなく搬入するために、それぞれの担当として小姓衆・鉄炮衆を付け置いた。彼らが常に御宿に張り付いていたら、3 人が迷惑するだろうから、担当の者どもは脇宿にいさせて、

御用のあるときに奉仕するよう命じたが、このやり方で支障が出る場合には、柔軟に対応してほしい。

○新史料3（寛永19年）閏9月27日 松井興長書状控 細川家大坂留守居宛

急ぎ一筆申し上げる。桑山理齋の子息作右衛門は、忠利様の代から細川家に寄寓していたが、先月中旬、おできができて山鹿へ湯治に行き、何を考えたが、そのまま出奔してしまった。このことは大和にいる理齋や、幕府の大坂町奉行にも届けた。作右衛門は山鹿に赴くに際して、隣に住む宮本武蔵に長持と鎧櫃を預かってくれるよう頼んでいた。武蔵は作右衛門自身が長持・鎧櫃に封をすることを条件に、これらを預かった。この荷物は封を付けたまま大和に送付する。

○新史料4（寛永20年）9月13日 細川光尚書状控 宮本武蔵宛

一筆申す。私はこの間、熱病で煩っていたが、すっきりと回復した。もう少し力を付けるので、心配はいらない。おまえの方は、寒くなる時候だが息災だろうか。様子を聞かせてほしい。精一杯の保養が肝要だぞ。春には熊本に下って、対面で話をしよう。

[本史料発見の意義]

1. “寛永17年細川文化人サークル”の一員としての宮本武蔵の姿が明らかに

新史料1～3によって、寛永17年の山鹿御茶屋に、武蔵と道鑑だけではなく、朝山意林庵と津川四郎右衛門が呼ばれていたこと、武蔵が細川家と縁の深い茶人桑山宗仙の孫と懇意であったことが、初めて判明しました。

晩年の忠利は、寛永17年の前半に江戸で柳生但馬守や沢庵和尚と問答し、禅剣一如の理を極めようとしていました。それは、統治者としての自己の人生を総括する営みであったようで、6月に帰国するとすぐ、忠利は柳生・沢庵とは別の問答の相手を揃えました。それが武家故実（武家の行動を律する歴史的規範）の道鑑・津川、儒学（東アジア共通の統治思想）の朝山意林庵、そして兵法の宮本武蔵らであった、ということが明らかになりました。

忠利はこのメンバーを11月3日から山鹿御茶屋に招いて対面しました。数日間にわたって問答が行われたと考えられます。従来、このときのメンバーは武蔵と足利道鑑が知られているのみでしたが、今回の発見で、“寛永17年細川文化人サークル”の全容と、その一員としての武蔵の姿が明らかになりました。

武蔵は、武家の歴史や禅、それに儒学と結び付いた、武士の思想としての兵法の体現者として招聘されたものと考えられます。

2. 『五輪書』執筆開始時の細川光尚との関係が明瞭に

寛永18年3月の忠利死去後も武蔵は、新史料3によれば熊本で文化人集団の中に身を置きながら、新史料4によれば新藩主光尚とも良好な関係にあったことがわかりました。わけでも、新史料4に記された寛永20年9月における光尚と武蔵との、思いやり、信頼感にあふれたやり取りは重要で、同年10月10日からの『五輪書』の執筆の背景に光尚の求めがあったとする説にリアリティを持たせる内容です。

3. 兵法家・宮本武蔵の歴史的立場が浮き彫りに

細川忠利が熊本に招聘した人々の履歴や文化的立場からみて、晩年の武蔵が兵法の

大家として相当の評価を得ていたことが、ますます明確になりました。

忠利は、同時代人から「一天下に続く人なし」と評された明君として知られます。寛永17年、死期を察した忠利は、足利将軍や室町期守護大名の子孫（足利道鑑、津川四郎右衛門）、禅僧（沢庵和尚）、儒者（朝山意林庵）、兵法家（柳生但馬守、宮本武蔵）らとの問答を通じて、同時代思想の総括に挑んだものと考えられます。武蔵が、ポスト戦国世代（幕藩体制確立期の支配層）のトップレベルの大名の政治・統治思想に大きな影響を与えうる兵法家であったことが、はっきりしてきました。

【公開情報】

本年11月3日（木・祝）～5日（土）に熊本大学附属図書館で開催される第37回熊本大学附属図書館貴重資料展「悲劇の藩主 細川光尚」にて、新史料3を公開する予定です。

*永青文庫研究センター

熊本大学附属図書館には、「永青文庫細川家資料」（約58,000点）や細川家の筆頭家老の文書「松井家文書」（約36,000点）の他、家臣家や庄屋層の文書群計10万点あまりが寄託・所蔵されており、永青文庫研究センターではこれらの資料群について調査分析を行っています。

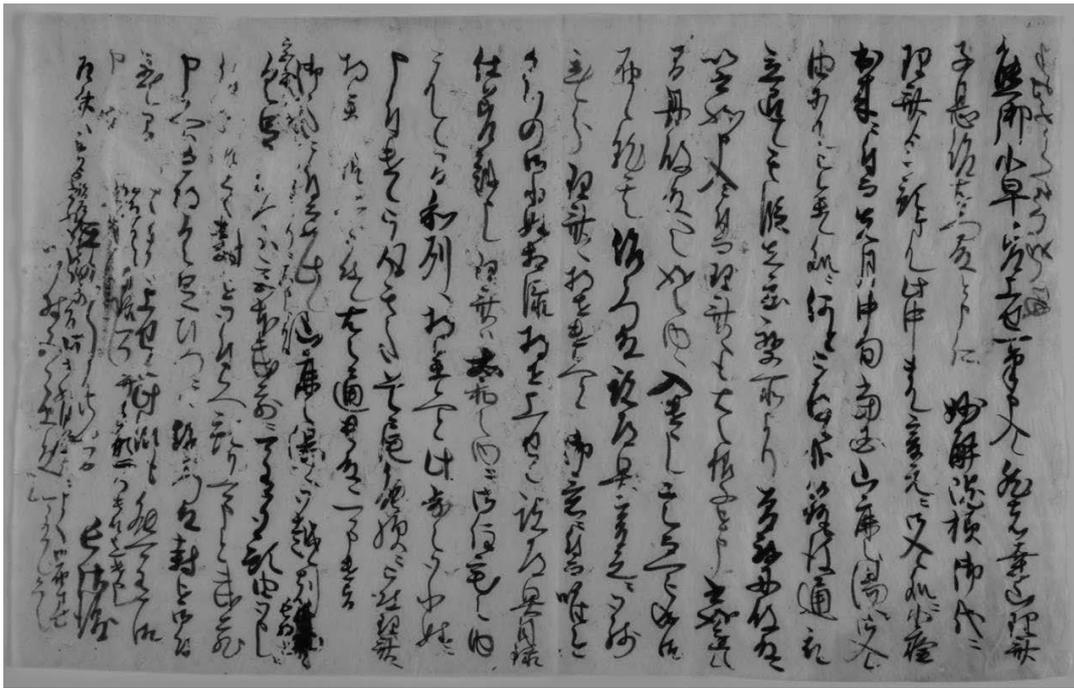
【お問い合わせ先】

熊本大学永青文庫研究センター

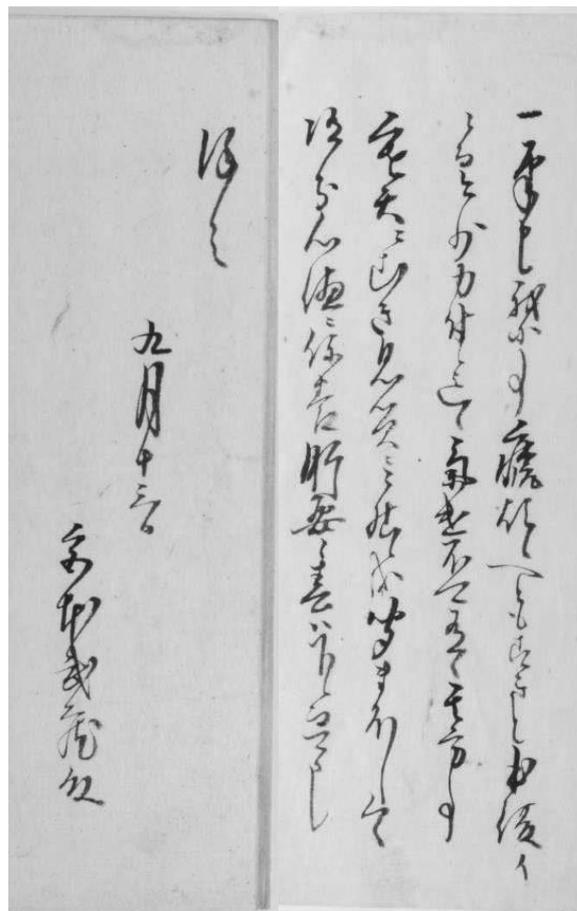
担当：（センター長）稲葉継陽

電話：096-342-2304

e-mail：eiseiken@kumamoto-u.ac.jp



新史料3 (寛永19年)閏9月27日 松井興長書状控 細川家大坂留守居宛
(熊本大学所蔵松井家文書17-30-20)



新史料4 (寛永20年)9月13日 細川光尚書状控 宮本武蔵宛(永青文庫4.2.111.3.2)

5. 講演要旨

- (1) 稲葉継陽「細川光尚とその時代」
- (2) 今村直樹「熊本藩の地域経済と河川舟運」

細川光尚とその時代

第 16 回永青文庫セミナー

2022 年 11 月 3 日 於 熊本大学附属図書館

稲葉 継陽

はじめに——細川光尚登場の歴史的前提——

藩主であった期間は寛永 18 年（1641）～慶安 2 年（1649）のわずか 8 年半ほど

(1) 「一天下にまた続く人もなき」父・忠利の存在

跡継ぎにとって父は鑑であるとともに自らを苛む最大の存在

→光尚は忠利死去後もその存在から逃れられない

(2) 「島原・天草一揆」（寛永 14～15 年）から「鎖国」体制の確立へ

数え年 19 で天草に出陣し原城攻めにも参陣→その極限的経験が光尚の成長に与えた影響は？

(3) 薩摩・天草・島原との長大な境目を抱える熊本領

肥後細川家は「隣国のおさえ」という自己認識→光尚の藩主としての行動にどう作用したか

(4) 寛永期を通じて継起する気象災害（旱魃と長雨）

寛永 3 年（1626）に始まり同 19 年にピークを迎える→その領民や家中そして光尚自身への影響は？

I 島原・天草一揆の試練

若くして妻子を亡くした（2、3）1 年後、寛永 14 年（1636）10 月に一揆勃発

(1) 江戸で育って初めて肥後に下ったのは一揆を討つため、3 万人以上が死す究極の戦場へ

(2) 天草に出陣するも一揆勢は有馬（南島原）原城に移っていてもぬけの殻、年内はやむなく川尻に帯陣

①12 月 12 日 幕府上使からの書状（4）

天草にはキリシタンはいなかったの、細川軍も原城に来たいとのこと。もうすでに佐賀の鍋嶋軍 3 万、それに柳川の立花飛騨、久留米の有馬玄蕃の軍も呼んでいる。だから、貴殿の参陣はもはや必要ない。陣所もない。軍勢を連れて早々に帰国されたい。

②寛永 15 年正月 8 日 忠利（江戸から駆け付ける途中）からの自筆書状（5）

天草で敵に逃げられ、島原でも人並みの働きに終われば、大変なことになる。上使の言いなりに終始すれば、おまえは笑い者になるぞ。おまえが悪いと言っているわけではない。だが、油断だと人に言われるところは、自分でも思い当たるはずだ。何としても世間の人の噂にならぬようにしたい。

(3) 細川家の陣所は海寄り、断崖上の三の丸から攻め入らねばならない（6）、しかし 2 月 28 日、細川家は天草四郎の首を捕る（11）、手柄の陣佐左衛門は名もなき雑兵

(4) 光尚の江戸での軍学の師・小幡勘兵衛（甲州流軍学の総帥）が光尚の心の支え（8、9）

【小括】

自身の如何ともしがたい未熟さと、現世の究極と、老臣から足軽らに至るまでの家中の働きあってこそその藩主であり御家であるということ、すべてを数え年 18 で一時に思い知らされる

II 家督相続の重圧

寛永 18 年（1641）3 月 17 日、父忠利が死去する（13）

(1) 忠利と父の三斎（忠興）とは、三斎隠居領 3 万 7,000 石の支配と相続をめぐる対立を抱えたまま

八代城主三斎の城普請や給地支配上の権限を忠利に従属させようとする將軍家光の意思が三斎に通じず、三斎隠居家を相続していた末子立允は、忠利の弟であるにもかかわらず、二人はきわめて疎遠（12）

→寛永 18 年（1641）3 月 17 日忠利死去、松井興長曰く（14）

この状況下での忠利の急死は、「御家」の「大事」である。家中では八代問題をめぐってお互いを警戒しあい、にらみ合っているような状況にあるが、自分と沢村友好は万事心をつにして、ただ光尚の家督継承のために、忠利の遺言に少しも違わず談合している。しかし、三斎が自分たち熊本の家老衆を憎んでいることは、幕閣にも細川家出入りの者たちにも、広く知れ渡っている。これは光尚の家督相続実現にとって不都合である。…自分の隠居領 3 万 7,000 石 + 立允給地 3 万石の別相続をもくろむ三斎

(2) 「一天下にまた続く人もなき」人の跡を継ぐ

同年 5 月 5 日、熊本領 54 万石の一円相続を幕府に認められ、6 月 14 日に熊本に帰着

① 6月10日付 沢庵和尚側近 or 従兄の稲葉信道から松井興長への意見 (15)

忠利様は「一天下にまた続く人もなき」器量の人でした。もし光尚殿の御国の仕置が少しでも滞ったなら、すぐに世間から軽んじられるでしょう。この一・二年が勝負どころです。あなたをはじめ家老衆の御覚悟にかかっています。ここが細川家の分岐点です。もし家老衆から光尚殿に申し上げたくても言えない案件があれば、自分が取次ぎます。

② 6月12日付 江戸での師・沢庵和尚の説諭 (16)

養生第一とし、いかに食事は厳禁。若年時の不養生は血管障害等の大病につながる。細川領は広大だから、国の端々まで統治を行き届かせるよう家老によく指示すること。さもないと、先年天草で一揆が起きて改易された寺沢家の二の舞になりかねない。入国したら旧例に準じて代替りの恩赦を実施し、一国の者どもをあと一言させて悦ばせるのがよい。国主としての自覚をもち、病を防ぐためにも、用心のためにも、親類や祖父の三斎のところへさえも、振舞に呼ばれて行くのは御法度とするべきである。振舞がしたいなら他所へは行かず、家老や重臣を召してするがいい。

(3) 八代問題の解決／宮本武蔵との関係

① 八代問題

正保2年(1645)に立允・三斎が相次いで死去、翌年には立允の子行孝に立允遺領3万石のみを相続させて宇土に移すことに成功…宇土細川家のはじまり

② 宮本武蔵と光尚

寛永17年に思想的(武家故実、禅、儒学、兵法)問答の相手として忠利が熊本に呼んだ宮本武蔵と、光尚も懇意に(17)

→寛永20年(1643)9月13日 光尚(在江戸)から武蔵(在熊本)への書状

寒くなる時候だが息災だろうか。様子を聞かせてほしい。精一杯の保養が肝要だぞ。春には熊本に下って、対面で話をしよう。

→武蔵はこの年10月10日から『五輪書』の執筆を開始、

【小括】

父の名声・遺産とともに、家中の対立をも一身に引き受けながら、藩主として船出した光尚。代替りを心配する声は多くあがり、それがまた光尚への重圧ともなった

III 病との闘い

(1) 藩主の病と権力の変容

① 18 藩主就任1年後の光尚の命令

痔瘻が改善しないため、裁可を求める家臣たちと着座で対面することができない。寝所で横になりながら間接的に申し入れを聞く。ただし重要案件以外は、自分ではなく、家老たちと相談するように。

② 19 「寛永の大飢饉」に突入するまさにその時、光尚の痔瘻は外科的施術を要する状況に

(2) 寛永20年(1643)正月10日、数え年25にして最初の遺書(20幕府老中宛、21細川家老宛)を熊本で執筆
若輩でありながら大国の相続を認められるにあたり、かたじけなき上意に浴したにもかかわらず、なんの御奉公もできずに相果てるとは口惜しい。肥後54万石は公儀に返上するが、自分の第一人に細川の名字ばかりを継がせて、末々まで御奉公できるように取り計らっていただきたい。

→家老たちにとって御国返上は、みづからが帰属する組織の解体を意味するから、たとえ光尚の意向であっても、にわかには容認できるものではない。しかし光尚は遺書を家老に託すほかなかった。幕府への提出は松井興長らに止められたものと考えられる。光尚の体調は2月には回復して参勤に出立(22)

【小括】

藩主と家臣との直接的関係が遮断されたことによって、御側用人の林外記をはじめとする光尚側近集団の権力が形成され、やがて家老合議制と競合

IV 「寛永の大飢饉」肥後を襲う！

父忠利が死去した寛永18年(1641)、大規模な虫害が発生したのを皮切りに、気象災害が継続的に発生し、「寛永の大飢饉」となった

(1) 飢饉の渦中での天草・長崎軍役のつとめ(23、27)

「鎖国」体制確立の最前線にあった細川家は飢饉と財政破綻に直面してもこれら軍役を果たさねばならない

(2) 飢饉に対する光尚の政治姿勢

① 隣国の状況を見聞・報告する「横目」たちを諸国に月に一度ずつ派遣して、飢饉の状況や統治・経済・軍

事の情報を収集 (25)

②百姓に対する姿勢

▼24 寛永 20 年 6 月 江戸から国元の惣奉行への指示

このままでは今年の秋もおそらく不作で、昨年に続いて飢饉となるだろう。米はもちろん雑穀に至るまで、救済に充てるために在庫分を集約し貯蔵せよ。隣国も飢饉だから、穀物を買えなくなる前に、今すぐ買い置いてはどうか。この点、家老衆と相談せよ。隣国もすぐには買い付けられないだろうから、当座の損得の考えは捨てて、百姓たちが飢えたときの対策をどうするかが重要なのだ。そのことを十分に合議せよ。

▼27 正保 4 年 (1647) 8 月 江戸から国元の側近への指示

今年も困窮した家臣たちが、一日暮らしのような態度で、知行地が荒れるのも構わず百姓を痛めるような年貢の取り立てをしたなら、百姓は天草・島原あたりへ続々と移住してしまうだろう。奉行衆と家老衆で相談して監察役を巡回させよ。

③家臣たちに対して

▼26 正保 2 年 9 月 江戸から御郡方横目衆 (監察官ら) への指示

家臣のうち「小身なる侍共」に「在郷」(知行地の村での生活) を命じていて、すでに多くの対象者が「在宅」しているが、給人らが在宅する村々の「作法」を守り、また質素な生活をしているかどうかを藩当局として把握し、その都度自分まで報告するよう命じる

→当座の損得を後回しにしてでも百姓の再生産の維持保障を第一に重視して、百姓・村に依存する家臣団の維持を図ろうとする光尚の政治姿勢 ex. 百姓に対する「私なき」統治の実現を追求した父忠利を彷彿

(3) 正保 4 年 (1647) の家中一大リストラ計画 (28) が示すもの——財政破綻の経緯

① 飢饉状況のピークに際して、侍・百姓の再生産をはかるため、上方などで米を大量に調達したが、家督相続以来連年の災害によって、「下々」への御救米給与の負担は膨れ上がった。

② 国の飢饉時には上方米価が高騰し、それを高値で調達して侍・百姓へ給与せざるをえず、忠利の代に公儀普請・軍用に天守に蓄積していた金銀は払底し、御蔵納も減少して借銀だけが増加したので、家臣団から「合力」=財政援助をうけて返済に充当した。

③ さらに正保 4 年も不作の上、こんどは上方米価が一転して暴落、すべてが裏目に出て財政が「手つかへ」の状態になるのは決定的であるため、「人をへらし申」すための具体的計画を幕府に提出することにした。→寛永末年からの大飢饉に伴う財政破綻は、上方米市場への藩財政の投機的依存がもたらす破壊的作用によって一挙に進展、光尚らは諸給人の年貢米 5 分 1 差し上げと、給人の召し放ち (リストラ) によってこれに対処

【小括】

(a) 細川家の上方米商人からの借銀、(b) 家臣団=給人衆の経営破綻、(c) 百姓の困窮と給人支配の拒否が、相互に絡み合い、光尚を追い詰めていた

V 光尚の死去と御国返上問題

リストラ計画を幕府に上申した 2 年後の慶安 2 年 (1649) 12 月 26 日、光尚は江戸にて 31 歳で急病死することであろうに光尚はまたもや御国返上の遺書をかき、幕府に提出。だが、家老衆には返上の意思などさらさらなかった。幕府との交渉により、光尚の忘れ形見・綱利 (数え年 8) への相続を実現させる

(1) 29 慶安 2 年 (1649) 12 月 19 日 細川光尚自筆披露状 (将軍への遺書)

亡父忠利は公儀(幕府)から大国を拝領し、その上、公儀は若輩の私に相続を許していただき、どう感謝してよいかわかりません。ところが、私自身なんの御奉公もできないまま、このような事態となりました。私の倅(後の綱利)は幼少のため、熊本藩 54 万石を継がせていただいても、これまたなんの御奉公もできないでしょう。この際、肥後の領国(「御国」)を幕府にお返します。

→死去した時、江戸には形見となるものはなにもなく(百姓・家臣の救済に充当か)、遺書の内容は近隣大名にも知れ渡った (30、31)

(2) 家老衆の対応 (31)

家老たちは慶安 3 年春の勸農に足軽たちを出している意図を島原藩主高力忠房に自ら次のように説明
光尚の忌中にもかかわらず、百姓たちと足軽たちとで国中の灌漑水路や河川堤防の普請をしている理由は、光尚が御国を公儀に差し上げると遺言し、肥後が公儀の御国になればなおさらのこと、今年の農業基盤整備が遅れては公儀に対して失礼にあたるからです。

→これは方便であろう、この年の年貢も細川家が取る気満々

【小括】

松井興長ら家老衆は、光尚の遺言に従う意思などさらさらなく、幕府と交渉し、幕府は4月半ばには綱利への熊本領一円相続を承認する。遺書 29 は、その時点で幕府側から細川家に返され、永青文庫細川家に伝来することになった

エピローグー光尚がのこしたもののー

【疑問】

光尚が遺書で「なんの御奉公もできないので御国を返上する」というときの、將軍・幕府への「御奉公」とはなにか？

- (1) 光尚死去直後に「勝家」なる仮名で家老中に提出された長文の諫言状 32 は、殿様の急死は「御先祖の罪咎」である、との衝撃的な文言で始まり、光尚代の家老たちの政治を痛烈かつ徹底的に批判する

■ 国中の民を痛ませ、家中の知行から五分一米を連年取立て、代々の御家来の多くを召し放って、国中に怒りと怨みを生じさせ、家中を分断してきた。国中の村々の年貢率を下げ、忠利時代以前の政治に帰ってこそ御代長久となろう。松井興長ら家老たちがこの意見を聞かずに家中の「迷惑」＝困窮が続けば、細川家はもしもの時に「隣国の押え」にはならないだろう。代替りの御上使への対応が終えたら自分と議論し、ご返事を承りたい。

- (2) 寛永 20 年 (1643) 3 月 光尚が熊本出発時に九州有事の際の対応策を列挙し家老沢村父子に渡した覚書 22

▼ 幕領となった天草については、細川家が嚴重に警戒していれば薩摩も手出しはしにくいので、「世間乱れ候時」にはその心得が肝要。

▼ 島津軍はおそらく日向から豊後口に攻め入るだろうから、豊後衆の中川・稲葉・日根野家とよく相談して防戦し、特に領内に豊後への要所を抱える中川家からは人質を取れ。

▼ 薩摩が動き出したなら、八代の防衛のために、肥薩国境と八代の中間点にあたる佐敷に家老沼田延之の備を置くよう指示する。

→ 一連の備えは細川・島津両家の関係が良好なら九州の平和が維持されるという光尚の認識 (第 9 条) に基づく、いわば専守防衛策

【細川光尚が次代にのこしたもの】

明君と評価された忠利の重圧のもとで、光尚は 17 世紀最大の危機に全力で相対したが、忸怩たる思いを残して短い治世を終えた。しかし彼の決然とした姿勢と政治的不如意こそが、九州の要を治める細川家の屋台骨、すなわち家老合議制を満面開花させた。

【光尚が私たちにのこしたもの】

光尚の公儀への御奉公とは、「隣国」＝薩摩島津家へのどっしりとした押えとなり、同時に天草や長崎の対外 (対ポルトガル) 問題に寄与することで、九州、ひいては日本の平和と安定を維持することにあつたと考えられる。

→ 非戦の維持こそが公儀への御奉公であり、細川家はその役割を果たせないのなら、肥後が幕府直轄領となったり、他の大名の領地になつたりしてもかまわない。軍事的な要所・大国は、非戦を実現できる者が治めるべきだ、という私利私欲を超えた光尚の思想を踏まえて、「天下泰平」の歴史をみるべきだというメッセージ。

【参考文献】

稲葉 継陽『細川忠利 ポスト戦国世代の国づくり』(吉川弘文館、2018 年)

熊本大学永青文庫研究センター『永青文庫叢書 細川家文書 意見書編』(吉川弘文館、2022 年)

熊本大学永青文庫研究センター「宮本武蔵晩年の人物像を示す新史料 4 点を発見」(2022 年)

<https://www.kumamoto-u.ac.jp/daigakujouhou/kouhou/pressrelease/2022-file/release220915-2.pdf>

熊本藩の地域経済と河川舟運

2022/11/14 於 熊本県庁地下大会議室
熊本大学永青文庫研究センター 今村 直樹

はじめに

基本テーマ 近世日本の都市と経済の発展を大きく支えた河川舟運。熊本藩において河川舟運はいかなる意味をもち、地域社会の経済活動に関わっていたのか？16世紀から19世紀までの長いタイムスパンで検討

◇ 前近代における河川舟運の重要性

- ・ 近代的交通機関の発達以前、河川舟運等の内陸水運は、貨物輸送手段として極めて重要な意味をもつ
- ・ イギリスの場合、国内に張り巡らされた運河網が、19世紀産業革命の貨物輸送を担う【大久保 1975】
→近世日本の場合、河川舟運は藩国家や地域社会の経済的発展にいかなる意味を持っていたのか？

◇ 現代日本社会の揺籃期としての近世

- ・ 「近世三〇〇年の平和」「近世は日本が日本らしい社会と文化を創造した時代」【朝尾 1985】
- ・ 大河川の沖積平野における港湾都市の建設および水田景観の形成…「日本の原風景」が確立した時代としての近世【深尾・中村・中林 2017】
→港湾都市の発展には、海運とともに、後背地の内陸部との物流が不可欠。河川舟運に着目する必要性

◇ 近世日本と熊本藩の経済的動向

- ・ 近世日本における米生産・稲作面積・人口の推移【表 1】
→17世紀の100年間で、米生産は約1.6倍、稲作面積は約1.4倍、人口は約1.6倍に急増。近世270年間では、米生産は約2.4倍、稲作面積は約1.6倍、人口は約1.9倍に到達
- ・ 熊本藩領でも生産力は大きく向上、1840年代の総生産物高は約162万石（米換算）以上【今村 2017】
→年貢上納分や自家消費量をこえた膨大な産物の存在。これらはどのように市場へと接続されたのか？

◇ 本講演のねらい

- ・ 16世紀から19世紀までのスパンで、熊本（藩）の地域経済と水運（とくに河川舟運）の展開を概観
- ・ 近世前・中・後期（＝17・18・19世紀）それぞれの時期の経済的趨勢をふまえながら、熊本藩領でどのような地域開発事業や殖産政策が行われ、それが河川舟運とどのような関係にあったかを解明
- ・ 河川舟運の視点に即して近世から近代への移行を展望し、県内の水運関係文化財の価値を考える素材を提供

1. 中世から近世へ

◇ 熊本藩細川家の都市制度＝「五か町」制

- ・ 熊本藩の地方統治の特徴…農村部における「手永」制、都市部における「五か町」制【地図】
- ・ 前者は、街道沿いや同一水系からなる戦国期以来の地域単位を「手永」という行政区画に設定し、その責任者である惣庄屋（百姓出身）に行政や運営を委ねたもの。19世紀初めには、藩領内で全51手永が存在
- ・ 後者は、熊本城下町のほか、高瀬・高橋・川尻・八代を城下町に準じる拠点都市（経済特区）と位置づけ、そこに住む町人に「地子免許」（土地に課される税金免除）などの優遇措置を付与したもの
- ・ 熊本町を除く「四か町」は、その多くが中世以来の港湾都市（海外にも接続）、交通の要衝としての性格
→例えば川尻町は、中世以来の緑川河口の港町。室町・戦国期には高瀬・八代とともに、海外への貿易港として繁栄。加藤清正は、川尻を年貢米の集積港および海軍の拠点として整備

◇ 高瀬・川尻・八代と密接に結びついた中世後期の内陸要地

- ・ 隈府（菊池郡）、山鹿（山鹿郡）、御船・豊内・隈庄（益城郡）、人吉（球磨郡）などの町場
→周辺部から豊かな山里の産物が集散され、河川舟運などで高瀬・川尻・八代などの港湾都市と接続
⇒このうち、中世の隈府は菊池氏の「守護所」として発展。その他の要地にも城郭が置かれ、戦国期以降は地域支配の重要拠点に。それを象徴するのが豊内（現甲佐町）における陣ノ内城の建設【稲葉 2021】

◇ 近世前期（17世紀）の河川改修工事の意義

- ・ 16世紀末から肥後を統治した加藤家、さらに寛永9年（1632）の加藤家改易後、肥後入国した細川家は、積極的に菊池川・白川・坪井川・緑川・球磨川などの河川改修工事を実施
→白川・坪井川の場合、熊本町開発や舟運のための付け替え工事が行われ、かつ白川の全流域では17世紀を通じて灌漑施設が整備【表2】【今村 2022】
⇒菊池川・緑川・球磨川の場合も、流路安定化のための工事がなされ、それにともない中下流部の新田開発が可能になるとともに、河口部の八代・川尻・高瀬に接続する河川舟運の発展がもたらされる
- ▽ 中世的物流構造の達成の上に設定された近世「五か町」制と、その発展をめざした近世前期の河川改修工事

2. 熊本藩領における河川舟運の役割

◇ 熊本藩領の水運：どれくらいの船数があったのか？

- ・ 細川家文書「諸御郡高人畜浦々船数其外品々有物帳」【表3】…元禄7年（1694）時点の領内の船数が判明
→船数トップ5（白抜数字は郡内順位）：①玉名郡 539 艘（**⑤**高瀬町 34 艘〔三反帆以上船 13 艘〕）、②飽田郡 522 艘（**②**川尻町 96 艘〔百石以上船 57 艘〕）、③高橋町 59 艘〔小船 8 艘〕、③八代郡 436 艘、④芦北郡 408 艘、⑤宇土郡 412 艘
⇒海沿いの郡が上位を独占（多くの獵船を所有）。「四か町」の場合、海運用の廻船を比較的多く所有
- ・ 一方で見逃せないのが、河川舟運を担った川平太船など川船の存在。川船数トップ5（白抜数字は郡内順位）は、①八代郡 143 艘（**①**上松求麻村 94 艘、**②**下松求麻村 49 艘）、②玉名郡 131 艘、③益城郡 81 艘、④飽田郡 63 艘、④山鹿郡 63 艘
→その大半が菊池川・緑川・球磨川流域の郡。その用途で注目されるのが、山鹿郡の「在々ヨリ御米高瀬え津出舟」。のちに山本郡の一部村々も、安価な舟運による高瀬蔵年貢米輸送を希望し、実現【玉名市史 2005】

⇒高瀬蔵への重要な年貢米輸送路（＝陸運よりも効率的）として機能していた菊池川舟運

◇ 大坂米市場の人気No1 銘柄だった高瀬米

- ・ 熊本藩は財政収入の9割強を米納年貢に依存。18世紀後半以降、一定量の高品質年貢米を大坂に廻漕
→19世紀初頭には、大坂米市場で15～20%のシェアを「肥後米」が占有！【高槻 2015】
- ・ 熊本藩の米蔵のうち、大坂廻米の対象となったのは高瀬・川尻・八代の「津端三蔵」。なかでも、最大の収穫量・積出量を誇ったのが高瀬蔵（文化年間の大坂廻米40万俵のうち、じつに20万俵が高瀬蔵！）
→天明4年（1784）、藩の勘定方役人は「大坂者高瀬米第一」に取り扱っており、品質に問題があっては米市場での「御直段」に影響が出るとして、本年からの年貢米納入検査の厳格化を上申【史料1】
⇒高瀬米の品質管理の厳しさを象徴するのが「見本米」。荒尾手永樺村（現荒尾市）では、高瀬蔵に納める大坂米市場用の見本米二俵のため、村内で180人を動員して、格別入念に「一粒選」を実施【史料2】【三澤 2015】
- ・ 天保12年（1841）高瀬御茶屋の南方に、大規模な年貢米保管庫として「御米山床」が建設。その碑文には、高瀬蔵に全年貢米を納入する玉名・山鹿両郡の郡代2名や惣庄屋8名も刻まれる¹
→河川舟運などを介し、高瀬蔵納めを行う各手永にとっても、年貢米品質維持のための保管庫は不可欠

¹ 熊本県教育委員会編『熊本県歴史の道調査－菊池川水運・資料編一』（同委員会、1987年）6-7頁。

▽ 藩財政の命運を握る「高瀬米」。その年貢輸送は河川舟運によって支えられ、高品質性にも貢献

3. 近世中後期の社会変容と殖産政策

◇ 近世中期（18世紀）＝経済的停滞の時代

- ・ 「高度経済成長の時代」17世紀に対して18世紀は農業成長が鈍化。飢饉による人口減少も発生【表1】
→土地と労働の投入拡大（＝外延的な増加）による17世紀的な農業生産の成長が限界に達し、新たな社会的対応を迫られたのが18世紀【深尾・中村・中林2017】
⇒こうした課題に対応すべく、18世紀の幕府や諸藩では「明君」による政治改革が相次ぐ

◇ 「地の利を尽くす」——殖産政策の展開

- ・ 米沢藩主上杉鷹山（1751-1822）…安永4年（1775）、財政再建のため、領地の隅々までを利用し尽くし、漆・桑・楮100万本を植え付け、領内の生産を増やすことを宣言＝「地の利を尽くす」「国産」という理念
→この政策の思想的背景には、経世家の太宰春台（1680-1747）の著作『産語』で唱えられた「尽地力之説」が存在。五穀にとどまらない様々な産物を、土地の特性に応じて生産すべきという主張【小関2016】
- ・ じつは、鷹山に先立つ細川重賢（1721-1785）の宝暦改革でも、同様の政策が看取可能。重賢が宝暦7年（1757）に定めた役人の服務規程には、郡方（農村行政担当）の奉行の役割について、「一年の折々で農耕と養蚕を奨励し…、地の利を興すこと」と規定【史料3】。『産語』における「尽地力之説」と類似
 - * 当時の熊本藩は、太宰春台『経済録』を各役所に配布し、役人に読ませていたとの指摘【磯田2011】
- ・ 実際、宝暦改革以降の熊本藩は、榎実や楮の生産を民間にも積極的に奨励。その結果、1840年代における前者の生産地は全51手永中32手永、後者のそれは33手永にまで拡大【今村2017】

◇ 殖産政策の成果——約162万石分の総生産物

- ・ 18世紀の停滞を経て、19世紀になると再び農業生産は成長局面へ【表1】。17世紀とは異なり、土地と労働の生産性が高まってもらされた成長【深尾・中村・中林2017】
- ・ 「諸御郡惣産物調帳」（上下2冊、個人蔵）…天保13年（1842）4月、藩の郡方役人によって作成。熊本藩領の農業生産物（諸作）・非農業生産物（余産）の数量とその額を調査したもの
→その一覧表【表4】には、田畑やそれ以外で生み出された膨大な産物が記載。その総額は約162万石！
⇒藩の殖産政策による榎実や楮も存在。また、耕地面積や土地生産性に応じた農業・非農業の戦略的選択も看取。まさに官民がともに「地の利を尽くした」結果、もたらされた膨大な産物
▽ こうした年貢上納分や自家消費量をこえた豊かな産物は、どのように市場へと接続されたのか？

4. 近世後期の地域経済と河川舟運への期待

◇ 近世後期（19世紀）における水利土木事業の再活性化

- ・ 近世後期の熊本藩領では、夥しい用水路・貫井手・溜池・石橋・水路橋・干拓地などの開発が進む。17世紀に匹敵する規模で、水利土木事業が再活性化。事業の政策・立案・実行主体は「手永」【吉村2013】
→こうした事業には、農業生産力の向上とともに、物流・交易の活性化を意図したものも存在（石橋など）

◇ 緑川上流部における通舟事業の展開

- ・ 文化年間、上益城郡甲佐手永塘方助役の渡辺官太は、矢部・砥用両手永の年貢米廻漕実現のため、緑川上流部の川浚えを実施【史料4】。彼は、球磨川舟運の中心地である上下松求麻村（八代郡、現八代市坂本町）に足を運び、舟の製作や通舟の方法などを学ぶ。その結果、年貢米のほか、板・材木など山の産物の緑川輸送が可能となり、「品下シ方之便利を得」る。この詳しい経緯については、彼が甲佐神社内に建てた「緑川上流通漕碑」に記載²

² 熊本県教育委員会編『熊本県歴史の道調査—緑川水運—』（同委員会、1989年）225-226頁。

→但し、当時の川浚えは、甲佐の豊内から砥用の桑津留までに留まり、その上流部は成就せず

- ・ But 嘉永7年(1854)に矢部手永で通潤橋・通潤用水事業が成ると、再び緑川通舟事業が浮上【吉村 2013】。元治元年(1864)の矢部・砥用・甲佐手永の惣庄屋は、矢部手永津留村以下の年貢米・材木の廻漕や諸産物の「融通」のため、昨年5月から緑川の川浚えに着手したこと、既に甲佐の船津橋から矢部の津留ヶ渚まで作業が完了し、ゆくゆくは五家荘・日向方面との産物交易による「永久御上下之御便利筋」が実現すると上申【史料5】

→矢部から川尻まで水運が繋がることで、日向なども含めた広域的「産物融通」を意図した惣庄屋たち

◇ 明治初期小国郷の通舟計画

- ・ 「産物融通」を可能にする河川舟運への期待は、緑川のみならず。文化13年(1816)阿蘇郡北里手永惣庄屋の北里伝兵衛は、日田(豊後国)への産物移出のため、杖立川の川浚えによる通舟事業を実施。但し、洪水のため定期的な川浚えの必要があり、通舟事業は継続できず【禿 1965】
- ・ But 維新後の明治5年(1872)、大塚磨たち地方役人が中心となり、茶・煙草などの産物移出のため通舟事業再興を計画【史料6】。熊本県への願書によると、産物とともに年貢米を遠方の大津ではなく日田に廻漕することで、従来官が支給してきた駄賃米も減り、「上下一廉之御為筋」になると主張【(c)】。郷備金(旧手永官錢)が用いられ、翌年には緑川などの川浚え経験者の関与のもと通舟が実現。この事業には北里柴三郎の父惟信も関与

→但し、その後の県政の方針転換のため川浚えの必要経費が調達できず、のち通舟事業は断絶【禿 1965】

- ▽ 幕末維新时期、「産物融通」を目指した積極的な通舟事業が展開。それは新時代を見据えた地域経済の挑戦

おわりに——近世から近代へ——

◇ 本講演のまとめ

- ・ 中世的物流構造の達成上に設定された近世「五か町」。近世前期の河川改修事業によって熊本藩領の河川舟運は発展し、大坂米市場移出用の高品質年貢米輸送にも重要な役割を果たす
- ・ 近世中期以降の官民協同の殖産政策の結果、豊富な産物が生まれると、その市場への販路として河川舟運は最重要視。幕末維新时期には、近世領主支配の枠組みをこえた「産物融通」を目指して、多くの通舟事業が実施

◇ 近代に継承された河川舟運の重要性

- ・ 近代でも河川舟運の重要性は失われず。明治政府は殖産興業政策にあたり内陸水運の充実を目指す【増田 1983】

→欧米視察で運河の重要性を認識した大久保利通。全国各地で河川舟運が発展し、鉄道との緊密な連携も展開

- ・ 熊本でも、19世紀末まで坪井川・菊池川・緑川の河口港が、物流・交易の最大拠点として機能【中村 1993】。舟運が発展した上下松求麻村(八代郡)では、昭和期でも「本村より球磨川を奪へば後に何も残らず」と断言³

▽ 長期にわたり物流・交易を支え続けた河川舟運。そして新時代を先取りしていた熊本藩の地域経済

参考文献

- ・ 朝尾直弘「民衆生活の進展」(『朝尾直弘著作集 第八巻』岩波書店、2004年。初出は1985年)
- ・ 磯田道史「近世中後期藩政改革と『プロト近代行政』」(『史学』80-1、2011年)
- ・ 稲葉継陽「地域史のなかの陣ノ内城跡」(「陣ノ内城跡」国史跡シンポジウム記念講演資料、2021年)

³ 熊本県教育委員会編『熊本県歴史の道調査—球磨川水運—』(同委員会、1988年)102頁。

- ・ 今村直樹「鋳工業生産の数量的接近」(後掲深尾・中村・中林編『岩波講座 日本経済の歴史 2 近世』所収、2017年)
- ・ 今村直樹「近世後期藩領国の河川分水問題と流域社会」(『永青文庫研究』5、2022年)
- ・ 大久保哲夫「イギリスに於ける鉄道時代前の運河について」(『明大商学論叢』55-5、1975年)
- ・ 禿迷廬『続小国郷史』(河津泰雄、1965年)
- ・ 熊本県教育委員会編『熊本県歴史の道調査―菊池川水運―』(同委員会、1987年)
- ・ 熊本県教育委員会編『熊本県歴史の道調査―球磨川水運―』(同委員会、1988年)
- ・ 熊本県教育委員会編『熊本県歴史の道調査―緑川水運―』(同委員会、1989年)
- ・ 小関悠一郎『上杉鷹山と米沢』(吉川弘文館、2016年)
- ・ 高槻泰郎「近世期市場経済の中の熊本藩」(稲葉継陽・今村直樹編『日本近世の領国地域社会』(吉川弘文館、2015年)
- ・ 玉名市立歴史博物館ころろピア編『玉名市史 通史篇上巻』(玉名市、2005年)
- ・ 中村尚史「産業革命期における近代的交通機関の発達と米穀輸送」(『交通史研究』31、1993年)
- ・ 深尾京司・中村尚史・中林真幸編『岩波講座 日本経済の歴史 2 近世』(岩波書店、2017年)
- ・ 増田廣實「殖産興業政策と河川舟運」(『社会経済史学』48-5、1983年)
- ・ 三澤純「熊本藩領社会を『領国地域社会論』から見つめ直す」(前掲稲葉・今村編『日本近世の領国地域社会』所収、2015年)
- ・ 吉村豊雄『日本近世の行政と地域社会』(校倉書房、2013年)

永青文庫研究センター年報

第14号 (2022年度)

発行日：2023年3月31日

発行者：熊本大学永青文庫研究センター

〒860-8555

熊本市中央区黒髪2-40-1

TEL 096-342-2304

印刷所：シモダ印刷株式会社